

第5章 考古学的考察

第1節 繩文土器の変遷と地域性

本遺跡からは、I～V群に分類される縩文時代前期末葉から中期中葉にかけての縩文土器が出土している。これらの分類基準と各土器群の内容は第3章第3節3（第1分冊）に記載した。従来の研究成果による土器編年との対応関係では東北地方中・南部の大木6式新段階から大木8a式中段階に相当し、十三菩提式・五領ヶ台式・阿玉台式系統の関東系土器、新保式系統の北陸系土器と考えられるものを伴う。ここでは、各土器群の出土状況を確認した上で主要な遺構出土土器を中心に検討を加え、各土器群の特徴と地域性および本遺跡の集落における縩文土器の変遷について考察する。

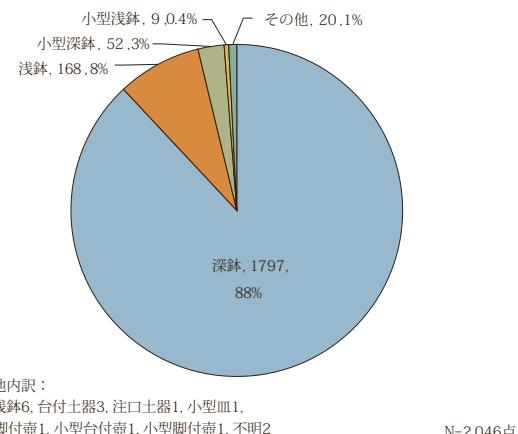
1. 土器群の出土状況と特徴

本遺跡で出土した縩文土器は総量 2,969.7kg および、このうち図化対象とした 2,046 点 (839.9kg) の器種構成は深鉢 1,797 点 (87.8%)、浅鉢 168 点 (8.2%)、小型深鉢 52 点 (2.5%)、小型浅鉢 9 点 (0.4%) などとなっており、深鉢が約 9 割、浅鉢が約 1 割弱を占め、残りをその他の少数器種と小型品で構成される。

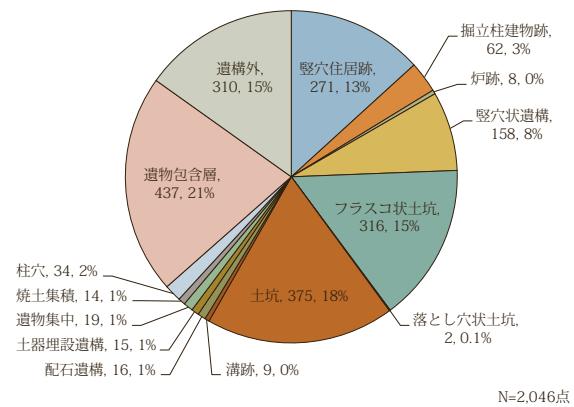
これらが出土した主な遺構は、竪穴住居跡、竪穴状遺構、フラスコ状土坑、土坑、土器埋設遺構などである。このうち、竪穴住居跡やフラスコ状土坑と一部の竪穴状遺構、土坑で比較的まとまった出土状況が見られた。このほか、遺物包含層や遺物集中でも集中的な出土状況を示す範囲が見られた。遺構の床面や底面における一括出土の状況を示すものは限定的であったが、竪穴住居跡やフラスコ状土坑の堆積土中に一括廃棄層を形成しているものがある。

なお、第3章第3節2（第1分冊）に既述のとおり今回の調査区においては遺構の重複が著しく、当時の集落内における人間活動の累積による遺物の二次的な移動や遺構堆積土への混入が繰り返されたことを示している。また、これによって重複する遺構間でも土層の変化に乏しい堆積層が形成されており、発掘調査における調査精度の限界に起因する遺物の混入についても一定程度考慮する必要がある。

そこで、ここでは二次的な移動や混入の可能性が小さいと考えられる完形・略完形個体と大型破片を主な対象とし、また各遺構の機能面に伴う一括資料は限定的であることから遺構堆積土出土のものを含めて検討を



第1図 縩文土器の器種構成



第2図 縩文土器の出土状況

第1表 遺構別出土土器集計表

※土器の残存状況に関わらず小破片から完形個体までを各1点として計数している。各遺構の床面・底面出土のものを含む数値には下線を付した。落とし穴状土坑・溝跡・柱穴等の集計は省略した。

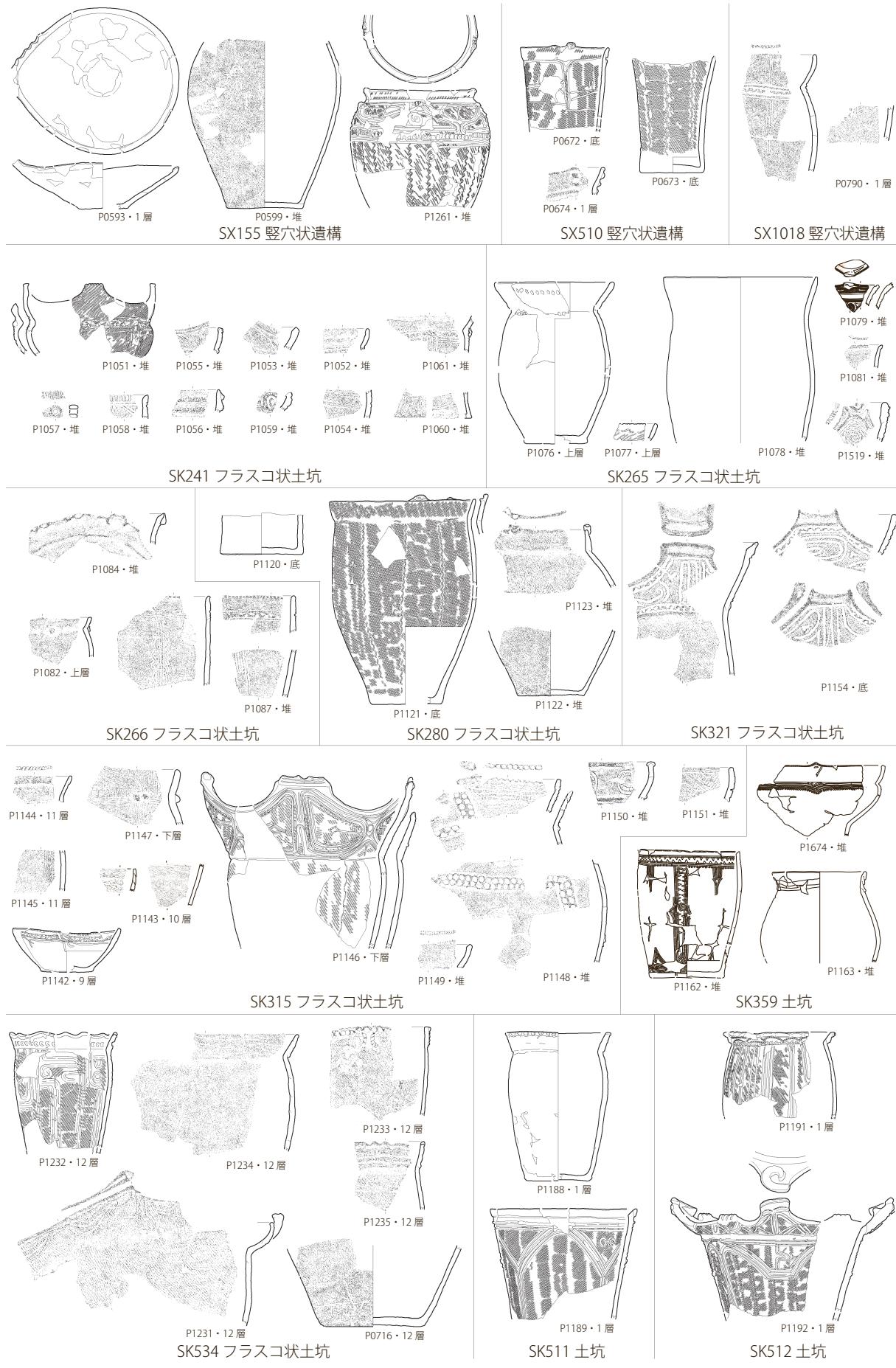
第2表 主要な土器の出土状況

分類				複数出土	単独出土
I群	1類	-	A種	-	SX2・SX3 壓穴状遺構, SK253・SK315 フラスコ状土坑, SK190・SK614 土坑, SX717 遺物包含層
	2類	-	A種	-	SB358 挖立柱建物跡, SK241・SK315 フラスコ状土坑, SX717 遺物包含層
II群	1類	(1)	A種	SX510 壓穴状遺構	SB611 挖立柱建物跡, SK206・SK262 フラスコ状土坑, SK75・725 土坑, SX14 遺物包含層
		(2)	B～L種	SX155・SX510 壓穴状遺構, SK315・ <u>SK321</u> ・ <u>SK280</u> フラスコ状土坑, SK598・SK614 土坑, SX14・SX610・SX717 遺物包含層	SI20 壓穴住居跡, SX3・SX1008 壓穴状遺構, SK508・SK721 フラスコ状土坑, SK303・ <u>SK501</u> ・SK513・SK525・SK550・SK576・SK566・SK710 土坑, <u>SX630</u> 土器埋設遺構, SX17・SX361 遺物包含層
	2類	(1)	A種	SB360 挖立柱建物跡, SK241・SK315 フラスコ状土坑	SX7 壓穴状遺構, SK206 フラスコ状土坑, SK47・SK135・SK147・SK609 土坑, SX14・SX361・SX610 遺物包含層
		(2)	B種	SK241・SK315 フラスコ状土坑, SK266・SK359・ <u>SK514</u> 土坑, SX717 遺物包含層	SI22 壓穴住居跡, SX4 壓穴状遺構, SK63・SK609・SK613 土坑, SX14・SX361 遺物包含層
		(3)	C種	SK265・SK511・SK512・SK614 土坑	SI20 壓穴住居跡, SX7・SX1008 壓穴状遺構, SK274・SK721 フラスコ状土坑, SK56・SK139・SK151・SK525・SK640 土坑, SX17・SX361・SX610・SX717 遺物包含層
	3類	-	A・B種	SK534 フラスコ状土坑, SX610 遺物包含層	SI22 壓穴状遺構, SB611 挖立柱建物跡, SK44・SK63・SK188・SK573・SK609 土坑, SX717 遺物包含層
III群	1類	(1)	A・B (1・2)・C (1～3)・D (1・2)・E (1～3)・F (1・2)・H (1)・J (1)・K・L (1・2)・P (1)種	SK41・SK116・SK267・SK282・SK534・SK606・SK612・SK721 フラスコ状土坑, SK519・SK546・SK609・SK656・ <u>SK1007</u> ・SK1014 土坑, SX14・SX17・ <u>SX608</u> ・SX610・SX666・SX717 遺物包含層	フラスコ状土坑, SK516・SK517・SK522・SK528・SK633・SK724, <u>SX319</u> 土器埋設遺構
		(2)	B(3)・C(4～9)・D(3・4)・E (4～7)・F (3)・G・H (2～4)・I・J (2・3)・L (3～5)・M・N・P (2)種	SI1 壓穴住居跡, SX2・SX1008 壓穴状遺構, SK90・SK108・SK126・SK116・SK606・SK612・SK656・SK721 フラスコ状土坑, SK303・SK524・SK525・SK550・SK609 土坑, SX14・SX17・SX610・SX717 遺物包含層・SK1014 土坑	SX7 壓穴状遺構, SK134・SK262 フラスコ状土坑, SK237・SK512・SK521・SK614・SK602・SK642・SK699, SX739 配石遺構
	2類	-	A～C種	SI1 壓穴住居跡, SX717 遺物包含層	SI20 壓穴住居跡, SK28・SK95・SK108・ <u>SK116</u> ・ <u>SK196</u> ・SK267・SK315・SK534・SK606 フラスコ状土坑, SK641・SK724・ <u>SK1007</u> 土坑, <u>SX608</u> 遺物包含層
	3類	-	A種	SB256 挖立柱建物跡, SX610・SX717 遺物包含層	SX7・SX155 壓穴状遺構, SK664 土坑
	1類	(1)	A～C・D (1)・E・F種	SI20・SI22 壓穴住居跡, SX2・SX4 壓穴状遺構, SK28・SK43・SK508 フラスコ状土坑, SK216・SK255・SK524・SK664 土坑, SX732 遺物集中, SX17・SX361・SX610 遺物包含層	SX7 壓穴状遺構, SK116・SK274・SK721・SK1006 フラスコ状土坑, SK37・SK38・SK105・ <u>SK171</u> ・SK307・SK509・SK654・SK725・SK705 土坑, <u>SX180</u> ・SX719 土器埋設遺構, SX14・SX717 遺物包含層
IV群	1類	(2)	D (2・3)・G (1)・H・I (1～5)種	SI22 壓穴住居跡, SB611 挖立柱建物跡, SX3 壓穴状遺構, SK651・SK662・SK664 土坑, SX14・SX17・SX610・SX717 遺物包含層	SX2・SX4 壓穴状遺構, SK133・SK508 フラスコ状土坑, SK190・SK587・SK591・SK654・SK659 土坑, SX215・ <u>SX271</u> ・ <u>SX288</u> ・SX719 土器埋設遺構, SX732 遺物集中
		(3)	D (4)・G (2・3)・I (6・7)・J種	SX7 壓穴状遺構, SK274 フラスコ状土坑, <u>SX719</u> 土器埋設遺構, SX14 遺物包含層	SI20・SI22 壓穴住居跡, SK40・SK43 フラスコ状土坑, SK403 土坑, SX17・SX610 遺物包含層

*完形・略完形個体と大型破片が出土した遺構を中心に記載したが、I群、II群1類(1)、2・3類、III群2・3類では小破片も含めた。ただし小破片の場合は複数出土していても単独出土として記載した。各遺構の床面・底面から出土している場合は遺構名に下線を付した。

加える。遺物の同時性についての層位的な根拠にはやや欠けるものの、今回確認した壺穴住居跡やフラスコ状土坑の堆積土には一括廃棄層と人為的埋土層が交互に確認されるものが多く、集落期における遺構の埋没は短期間に進行したことが遺構出土炭化物の放射性炭素年代測定結果（第4章第7節、SK721 フラスコ状土坑）によって示されていることを付記しておく。分類ごとに見た主要な土器の出土状況は第1表の通りである。これを踏まえて分類基準に示した土器の特徴から類型化を試みた結果、土器の形態や文様の特徴に一定程度の共通性を認めるまとまりを抽出することができたので以下に述べる。

I群1類 まとまった出土状況は見られず、遺構堆積土から出土した少數の破片で構成される。このため層位的な裏付けを持つ一群ではないが、器形と文様の共通性から本類を設定した。全体の器形が明らかなものはなく、頸部が括れる深鉢の口縁部から胴上部の破片がある。口縁部形態が明らかなものは少ないが、平縁を主体に波状縁も見られる。文様は縦位隆線文または貼付文と連続刺突文、充填的な連続短沈線文、連続弧状沈線文などにより施文するA1種を主体とし、平行沈線文と連続刺突文により施文するA2種、櫛刃状工具による多状沈線文と豆粒状貼付文を施文するA3種も見られる。文様構成から本類と後述するII群1類(1)との間に系統



第3図 II群土器の出土状況 (1)

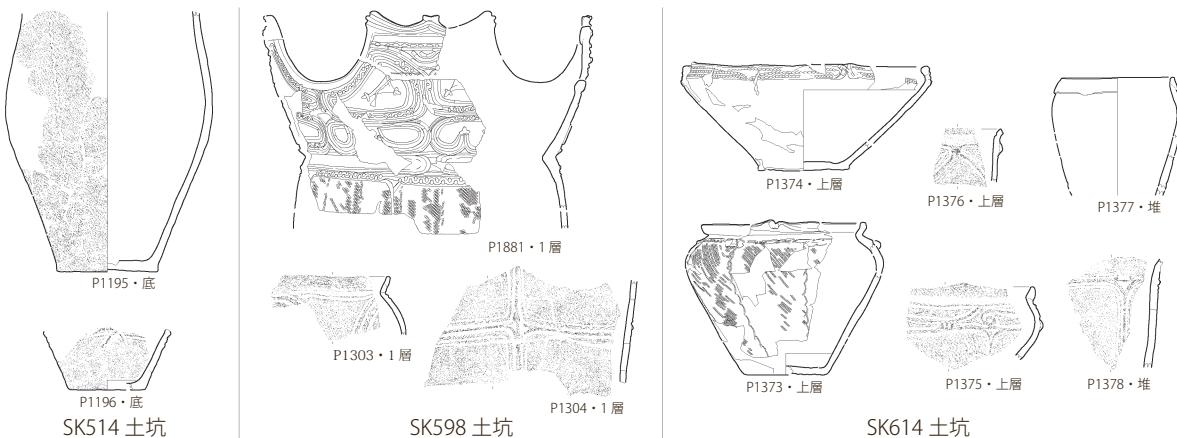
関係が認められ、個々の資料での区別はあまり明瞭でない。また、器形や文様に不明な点が多く、詳細な組成を明らかにすることはできない。

I群2類 まとまった出土状況は見られず、遺構堆積土から出土した少数の破片で構成される。層位的な裏付けを持つ一群ではないが、器形と文様の共通性から本類を設定した。全体の器形が明らかなものではなく、頸部が強く括れる深鉢の口縁部から胴上部の破片がある。口縁部形態が明らかなものは少ないが、平縁が主体である。文様は極細の粘土紐により梯子状・斜格子状・鋸歯状貼付文などを充填的に施文するA1種で構成される。器形や文様に不明な点が多く、詳細な組成を明らかにすることはできない。

II群1類 以下に述べる器形と文様の分類から(1)・(2)に細分した。

II群1類(1) まとまった出土状況は見られず、遺構堆積土から出土した少数の破片で構成される。層位的な裏付けを持つ一群ではないが、器形と文様の共通性から本類を設定した。全体の器形が明らかなものではなく、深鉢の口縁部破片がある。口縁部形態が明らかなものは少ないが、平縁を主体に突起付平縁・波状縁も見られる。文様は縦位隆線文または貼付文と連続刺突文、充填的な連続短沈線文、連続「ハ」字状沈線文、斜格子状沈線文などにより施文するA1種で構成される。既述の通り本類は文様構成からI群1類の系譜を引くものと考えられ、個々の資料での区別は曖昧な点がある。また、器形や文様に不明な点が多く、詳細な組成を明らかにすることはできない。

II群1類(2) SX717遺物包含層2層からまとまって出土している。また、SX3・155・510・1008竪穴状遺構、SK280・315・321・508・721フラスコ状土坑堆積土など比較的多くの遺構から数個体ずつ出土している。器種構成は深鉢88.5%、小型深鉢2.6%、浅鉢8.4%、小型浅鉢0.5%である。器形は深鉢D・F～J・L・N・P～R・W・Y類、小型深鉢D・H・I・O類、浅鉢A2・B1・B2・F2・G1類、小型浅鉢A1類の23種である。このうち主体を占めるのは胴中位から上部にかけて膨らむ深鉢I・N類、口縁部が強く内弯する深鉢R類、胴部から口縁部が外反ないしは直線的に外傾する深鉢Y類、上面観が橢円形を呈する浅鉢B2類である。口縁部形態は平縁・突起付平縁・波状縁・大波状縁が同程度の比率を占めるほか、小波状縁も見られる。文様は沈線文あるいは沈線を添わせた隆線文に加えて、連続交互刺突文・連続刺突文・押引文・押圧縄文により施文するものがある。文様構成は極めて多様であるが、単位を意識したものが主体となる。このうちある程度主体を占めるものは4単位の大波状縁の波頂部に「一」字状貼付文や勾玉状突起、波頂部下の口縁部に連結「Y」字状文や左右対称の三角形・弧状区画文などを施文するB4・B5種、4単位の波状縁の波頂部下や胴上部、平縁



第4図 II群土器の出土状況(2)

第5章 考古学的考察

の口縁部などに楕円形貼付文や「C」字状隆線文などを施文する C1～C3 種、口縁部に弧状・三角形区画文を施文し、胴部に「Y」字状・小波状隆線文を垂下させる D5・D7 種、頸部に横位無文帯を伴い胴上部に弧状・三角形区画文を施文し、胴部に「Y」字状隆線文を垂下させる E7 種、口縁部～胴上部に水平方向の連続文または横位平行文を重層的に施文する K1 種、単純な突起を持ち無文または地文のみを施文する L1・L2 種である。Ⅲ群 1 類 (1) で多用される、上下で対向する弧状文や渦巻文を施文するもの (F1・G1～G5 種) も見られる。なお、後述のⅢ群 1 類 (1) に分類した A～C・K 種の一部、V 群 2 類に分類した A・B 種の一部は本類に伴うと考えられる。

II群 2 類 以下に述べる器形と文様の分類から (1)～(3) に細分した。

II群 2 類 (1) まとまった出土状況は見られず、遺構堆積土から出土した少数の破片で構成される。層位的な裏付けを持つ一群ではないが、器形と文様の共通性から本類を設定した。全体の器形が明らかなものはなく、頸部が括れる深鉢の口縁部から胴上部の破片がある。口縁部形態が明らかなものは少ないが、平縁が約半数を占め、突起付平縁・波状縁も見られる。文様は細沈線による渦巻状・円形・三角形・梯子状・連続「ハ」字状沈線文と三角形彫去文などにより充填的に施文する A1 種で構成される。器形や文様に不明な点が多く、詳細な組成を明らかにすることはできない。胎土に微細な雲母片を含むものを散見する。

II群 2 類 (2) SK241・266・315 フラスコ状土坑、SK359・514 土坑などで 1～数個体ずつ出土している。また、SX717 遺物包含層 2 層からも出土している。SK315 フラスコ状土坑および SX717 遺物包含層 2 層の出土状況から概ね II群 1 類 (2) に伴う一群と考えられるが、器形と文様の共通性から本類を設定した。全体の器形が明らかなものは少ないが、深鉢 C・I・L・Q・X・Y 類、浅鉢 B1・G1 類の 8 種が確認できる。このうち主体を占めるのは頸部と胴中位に二つの屈曲部を持ち、胴上部は球状に膨らみ胴下部は円筒状を呈する深鉢 Q 類、円筒形基調で口縁部が緩く内弯する深鉢 X 類および口縁部が外反ないしは直線的に外傾する深鉢 Y 類である。口縁部形態は平縁を主体に突起付平縁・波状縁も見られる。文様は連続短沈線文、平行沈線文または半隆起線文と連続交互三角形彫去文、連続刺突文を組み合わせて施文する B1 種で構成される。連続短沈線文は口縁上端部に特徴的に施文され、連続交互三角形彫去文などを組み合わせた文様は口縁部または頸部に横位に施文されるほか、胴部に垂下させるものもある。胎土に微細な雲母片を含むものを散見し、P1162 は胎土の粘土・砂粒組成が在地材料と異なる (第 4 章第 9 節)。

II群 2 類 (3) SK265 フラスコ状土坑、SK511・512・640・1007 土坑などで 1～数個体ずつ出土している。また、SX361 遺物包含層、SX717 遺物包含層 2 層、遺構外からも複数個体が出土している。単独出土が主体であるため層位的な裏付けを持つ一群ではないが、器形と文様の共通性から本類を設定した。全体の器形が明らかなものは少ないが、深鉢 L～N・P・Q・T・Y 類の 7 種が確認できる。このうち約半数を胴部から口縁部が外反ないしは直線的に外傾する深鉢 Y 類が占め、次いで胴中位から上部にかけて膨らむ深鉢 N 類が見られる。口縁部形態は約半数を波状縁が占め、次いで平縁・突起付平縁が見られる。文様は沈線を添わせた隆線文に加えて、連続刺突文・連続短沈線文を施文するものがあり、文様構成は C1～C4 種がほぼ同程度の比率で見られる。口縁上端部の連続短沈線文 (C1～C3 種)、細い竹管状工具による連続刺突を加えた沈線 (C1 種)、押引文 (C2 種)、胴部に垂下する「Y」字状隆線文や頸部に施文される接点が「X」字状となる楕円形横帯区画 (C1～C4 種) が特徴的である。また、胎土に雲母片を多く含むものが見られ、P0170・0178・0527・0780 は胎土の粘土・砂粒組成が在地材料と異なる (第 4 章第 9 節)。

II群 3 類 まとまった出土状況は見られず、SK534 フラスコ状土坑、SX610・717 遺物包含層などで 1～数個体ずつ出土しているほか、遺構堆積土から少数の破片が出土している。層位的な裏付けを持つ一群ではないが、



第5図 III群土器の出土状況（1）



器形と文様の共通性から本類を設定した。全体の器形が明らかなものは少ないが、深鉢F・N・P・T・Y類、浅鉢G1類の6種が確認できる。口縁部形態は約6割を平縁が占め、次いで突起付平縁・小波状縁・波状縁が見られる。文様は半截竹管状工具による半隆起線文や連続刺突文、細密沈線文を施文するものがあり、文様構成はA1～A4・B1種が見られる。格子目状の細密沈線文(A1種)、半隆起線文と爪形状の連続刺突文(A2・B1種)が特徴的で、地文に縄文を伴うもの(B1種)もある。器形や文様に不明な点が多く、詳細な組成を明らかにすることはできない。胎土に微細な雲母片を含むものを散見し、P1798は胎土の粘土・砂粒組成が在地材料と異なる(第4章第9節)。

III群1類 以下に述べる器形と文様の分類から(1)・(2)に細分した。

III群1類(1) SK534 フラスコ状土坑、SK519・546・1007 土坑、SX319 土器埋設遺構、SX608・666 遺物包含層などで1～数個体ずつ出土している。また、SK116・606・612・721 フラスコ状土坑、SK609 土坑、SX14・17 遺物包含層などで複数個体、SX610 遺物包含層およびSX717 遺物包含層1層では10個体以上がIII



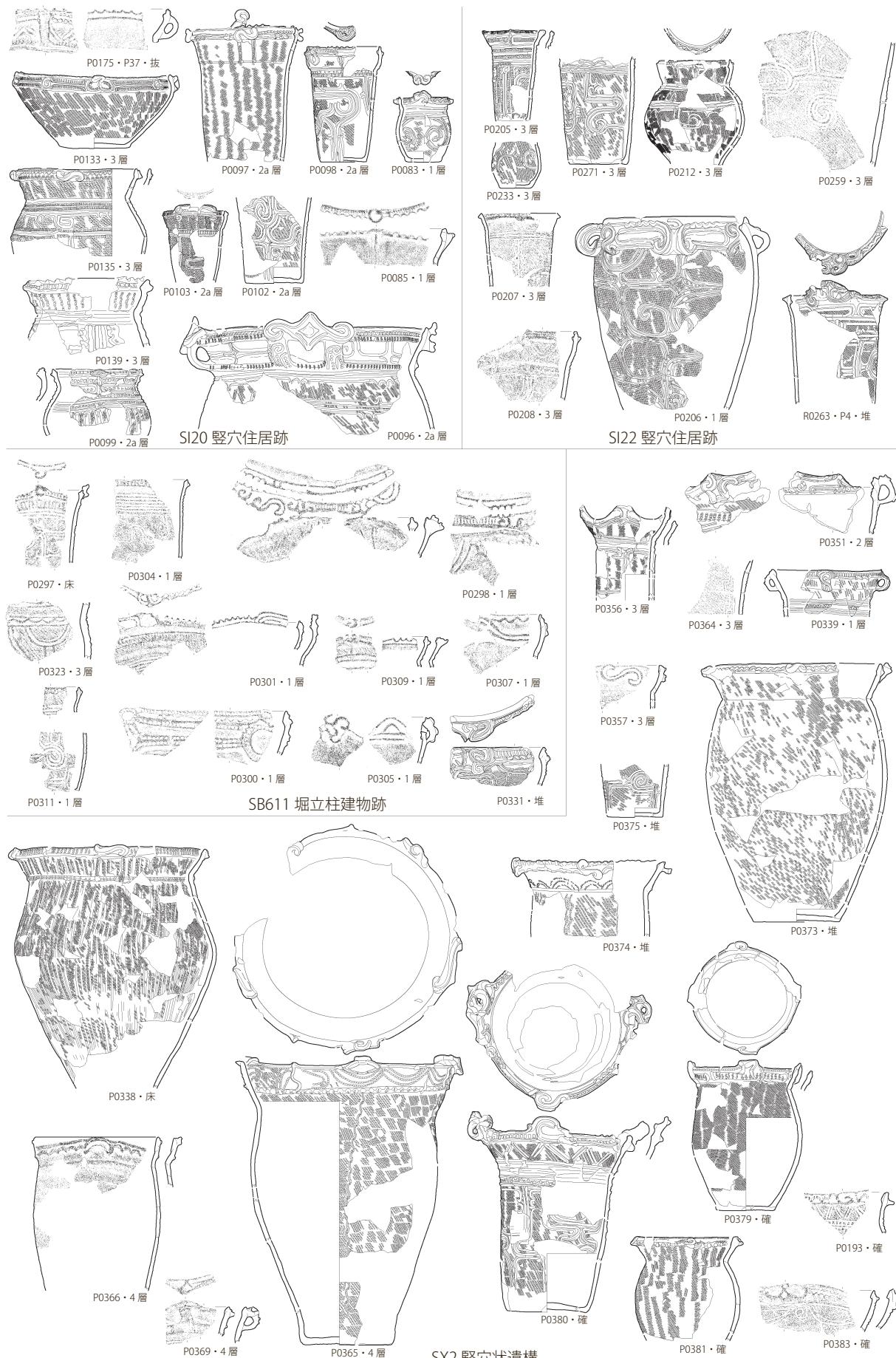
第7図 III群土器の出土状況(3)

第5章 考古学的考察

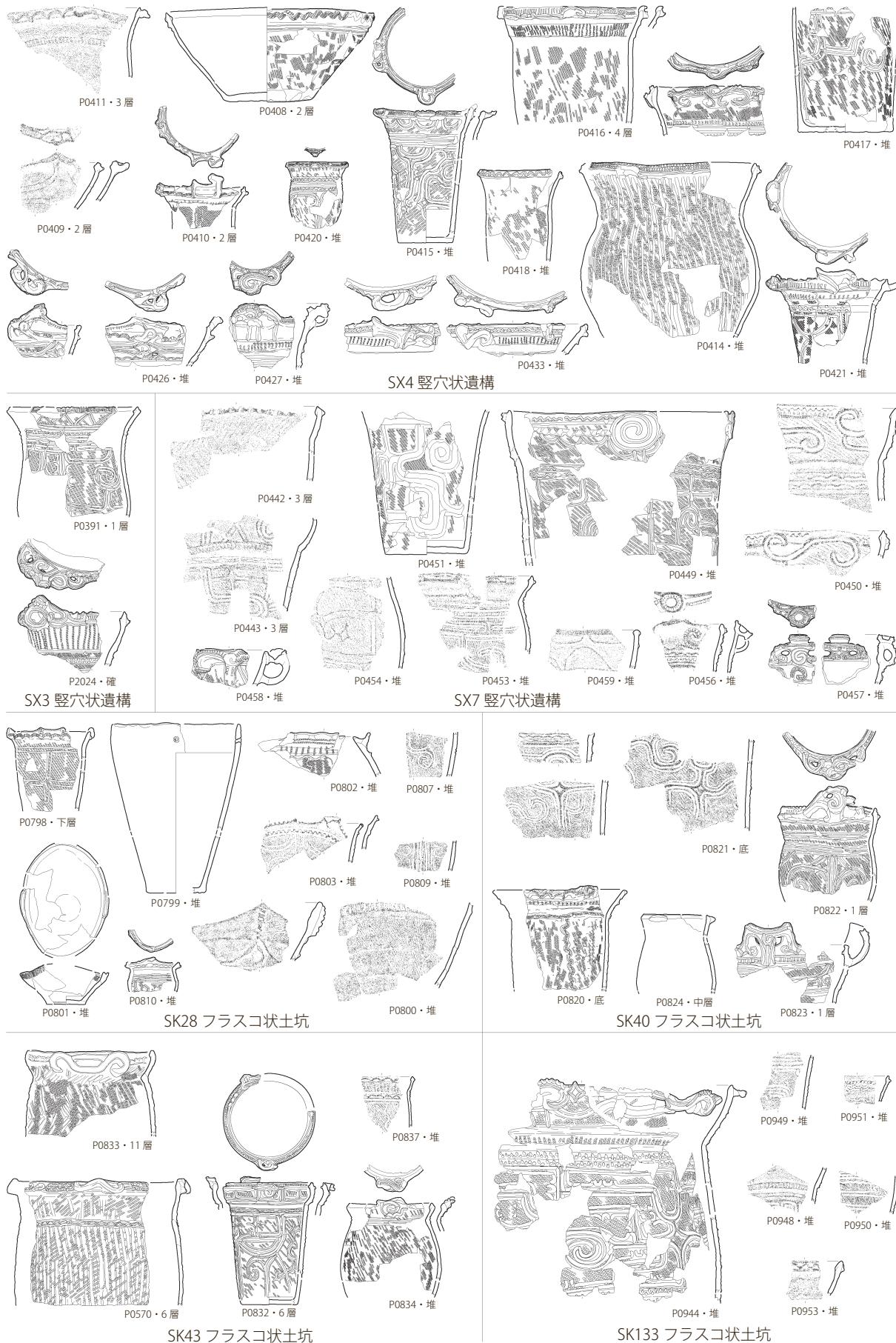
群1類(2)とともに出土している。器種構成は深鉢85.9%、小型深鉢0.5%、浅鉢13.0%、小型浅鉢0.5%である。器形は深鉢B～J・L～N・P・R・S・V～Y類、小型深鉢J類、浅鉢A1・B1・B2・C・D・F1・G1・G2類、小型浅鉢B1類の29種である。このうち突出して多くを占める器形はなく、多様性に富んだ構成となっている。胴中位から上部に膨らみを持つ深鉢F・H・J・N類を主体に、口縁部が外反ないしは直線的に外傾する深鉢Y類がある。また、胴部から口縁部が内弯し、口縁部に鍔状隆帯または横位隆線文を巡らせる深鉢W類がある。口縁部形態は平縁が約半数を占め、突起付平縁と波状縁も見られる。大波状縁はごく少ない。文様は押圧縄文あるいは押圧縄文を添わせた隆線文に加えて、縦位連続押圧縄文、連続指頭押圧文、連続刺突文により施文するものがあり、文様構成は極めて多様である。このうちある程度主体を占めるものは口縁部に弧状・三角形区画文を施文するC1・C2種、上下で対向する弧状・菱形区画文と渦巻文を施文するE1・E2種、横位平行押圧縄文を施文するK1～K5種、接点がX字状となる橢円形横帯区画文を施文するL1・L2種である。胴部文様帯を小波状垂下降線文などで4単位に区画するもの(F2・F3種)も見られる。なお、本類に分類したA～C・K種の一部は既述のⅡ群1類(2)に伴い、V群2類に分類したA・B種の一部は本類に伴うと考えられる。

III群1類(2) SI1 壓穴住居跡からまとめて出土しているほか、SX2 壓穴状遺構、SK90・303・524・525・550・602 土坑などで複数個体が出土している。また、SK606・612・721 フラスコ状土坑、SK609 土坑、SX14・17・SX610 遺物包含層などで複数個体、SX717 遺物包含層1層では10個体以上がⅢ群1類(1)とともに出土している。器種構成は深鉢85.4%、小型深鉢1.8%、浅鉢12.3%、台付浅鉢0.6%である。器形は深鉢A・C～J・L・M・P・R・T・V～Y類、小型深鉢E・U・W類、浅鉢A1・B1・B2・C・D・F1・F2・G1・G2類の30種である。このうち突出して多くを占める器形はなく、多様性に富んだ構成となっている。胴中位ないしは上部に膨らみを持つ深鉢H・J類、口縁部に鍔状隆帯または横位隆線文を巡らせる深鉢W類がやや多くを占める。口縁部形態は平縁が約半数を占め、突起付平縁と波状縁も見られる。大波状縁はほとんど見られない。文様は押圧縄文あるいは押圧縄文を添わせた隆線文に加えて、縦位連続押圧縄文、連続指頭押圧文、連続刺突文により施文するものがあり、文様構成は極めて多様である。このうちある程度主体を占めるものは口縁部に縦位連続押圧縄文や連続指頭押圧文などの水平方向の連続文を伴って弧状文を繰り返し施文するC7～C9種、口縁部および胴部に「Y」字状・連結「Y」字状垂下降線文などを施文し方形基調の区画を施文するI1～I4種、口縁部に縦位連続押圧縄文や連続指頭押圧文などの水平方向の連続文を施文するJ2・J3種、口縁部に接点がX字状となる橢円形横帯区画文を施文し、区画内に縦位連続押圧縄文などを充填施文するL3～L5種である。

III群2類 SI1・20 壓穴住居跡、SX717 遺物包含層から複数個体が出土しているほか、SK116・196・267・606 フラスコ状土坑、SK724・1007 土坑、SX608 遺物包含層などからも出土している。単独出土が主体であるため層位的な裏付けを持つ一群ではないが、器形と文様の共通性から本類を設定した。全体の器形が明らかなものは少ないが、深鉢C・E・F・I・J・L・W・X・Y類、浅鉢B1・E・F1・G1、小型浅鉢G1類が確認できる。胴上部に膨らみを持つ深鉢E・F・I・J類がやや多くを占める。口縁部形態は平縁が約半数を占め、突起付平縁・波状縁も見られる。大波状縁はごく少ない。文様は押引文あるいは沈線を添わせた隆線や連続指頭押圧・連続短沈線を加えた隆線により施文するものがあり、文様構成はA1・A2・B1・B2・C1種が見られる。接点が「X」字状となる橢円形横帯区画文(A種)、連続指頭押圧を加えた中太の隆線(B種)、「Y」字状・連結「Y」字状垂下降線文(A・B種)、器面に粘土紐の積み上げ痕跡を残し連続指頭押圧を加えるもの(C種)が特徴的である。また、胎土に雲母片を含むものを散見する。



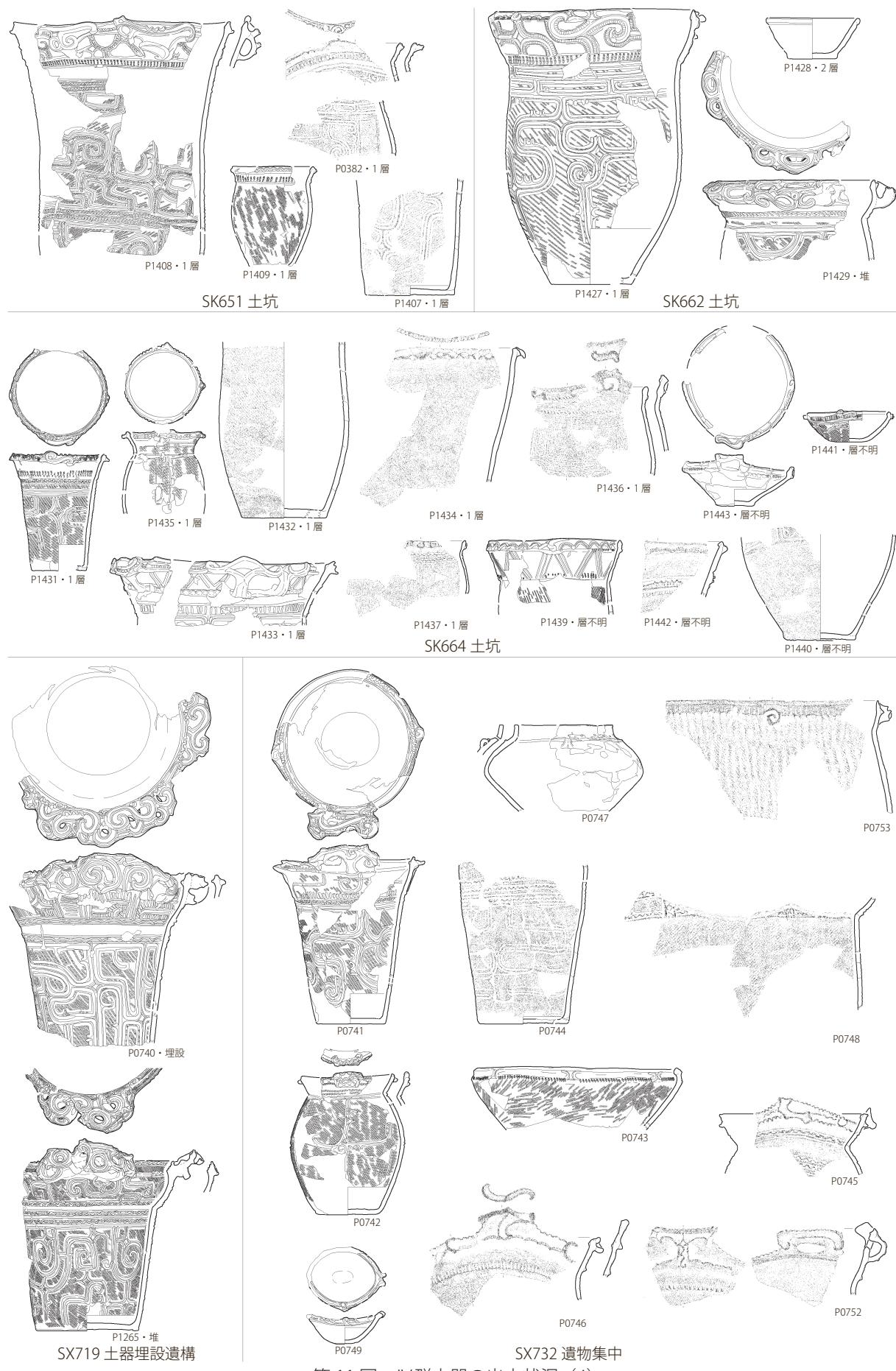
第8図 IV群土器の出土状況（1）



第9図 IV群土器の出土状況 (2)



第10図 IV群土器の出土状況 (3)



第11図 IV群土器の出土状況 (4)

III群3類 SX610 遺物包含層およびSX717 遺物包含層1層から複数個体が出土しているほか、遺構堆積土から少數の破片が出土している。SX610 遺物包含層およびSX717 遺物包含層1層の出土状況から概ねIII群1類に伴う一群と考えられるが、器形と文様の共通性から本類を設定した。全体の器形が明らかなものは少ないが、深鉢D・G・H・J・L・N・U・X・Y類、浅鉢B1・E・F1・G1類、小型浅鉢G1類が確認できる。胴中位が膨らむ深鉢D類、胴部が外反ないし直線的に外傾する深鉢L類がやや多くを占める。口縁部形態は平縁を主体に突起付平縁と少數の波状縁も見られる。文様は半截竹管状工具による半隆起線文や押引文、爪形の連続刺突文を多用し、III群1類に見られる押圧縄文、連続指頭押圧、小波状隆線を併用するものも多い。文様構成は胴部を縦位・横位に区画して「U」字状・弧状文などを施文するA1種、口縁部に横位平行半隆起線文を施文し爪形の連続刺突を加えるA2種が見られる。

IV群1類 以下に述べる器形と文様の分類から(1)～(3)に細分した。

IV群1類(1) SI20・22 竪穴住居跡、SX2・4 竪穴状遺構、SK524・664 土坑、SX732 遺物集中から複数個体がまとまって出土している。また、SK28・43・508 フラスコ状土坑、SK171・216・255・654 土坑、SX180 土器埋設遺構などからも1～数個体ずつ出土している。器種構成は深鉢72.2%、小型深鉢7.5%、浅鉢17.3%、小型浅鉢2.3%、台付浅鉢0.8%である。器形は深鉢D・H～N・P・X・Y類、小型深鉢D・G～O・U類、浅鉢A1・A2・B1・B2・C・D・F1・F2・G1類、小型浅鉢A1・B2・G1類、台付浅鉢A類の33種である。このうち突出して多くを占める器形はなく、多様性のある構成となっているが、III群土器と比較すると集約化が見られる。胴中位から上部に膨らみを持つ深鉢D・H・I・N類を主体に、胴部が円筒形ないしはやや外傾する深鉢P類が見られる。口縁部形態は平縁を主体に突起付平縁と少數の波状縁も見られる。文様は沈線文を主体に角押状の連続刺突文、押圧縄文を多用し、胴部に地文の縄文と合わせて指ナデ状条痕文を施文するものが見られる。口縁上部を横位の隆線文で区画して幅狭の文様帯を設け、連続指頭押圧、縦位連続押圧縄文、角押・爪形状の連続刺突、小波状・連弧状隆線などの水平方向の連続文を施文するものが主体を占める。文様が口縁上部に集約されるもの(A種)、口縁部に集約され連弧状・鋸歯状文などを施文するもの(B種)、口縁上部に「S」字状・渦巻状などの単純な突起を付加し、直下の口縁部に二本一対の縦位隆線文を垂下させるもの(C種)、胴部に縦位・横位あるいは方形区画文を施文するもの(D1・E1～E3・F1～F3)、胴部に渦巻状・クランク状文を繰り返し施文するもの(E4・F4)がある。

IV群1類(2) SB611 掘立柱建物跡、SK133 フラスコ状土坑、SK591・651・659・662 土坑、SX215・271・288 土器埋設遺構などから1～数個体が出土しているほか、SI20・22 竪穴住居跡、SX2・4 竪穴状遺構、SK508 フラスコ状土坑、SK524・654・664 土坑などで複数個体がIV群1類(1)とともに出土している。器種構成は深鉢94.6%、小型深鉢5.4%で、IV群1類(1)に分類した浅鉢類の一部は本類に伴うと考えられる。器形は深鉢A・D・H～N・P・Y類、小型深鉢G・H・M類の14種である。IV群1類(1)で主体を占めた胴部に膨らみを持つ器形は比率を減らし、胴部が外反ないしは直線的に外傾する深鉢L類、胴部が円筒形ないしはやや外傾する深鉢M・P類が主体を占める。口縁部形態は平縁と突起付平縁で概ね半々の比率となる。文様は平行沈線または沈線を添わせた隆線を主体に連続刺突文、押引文、縦位連続押圧縄文を多用する。ほぼ全てが口縁上部に幅狭の文様帯を持ち、「S」字状・渦巻状・菱形突起や、これらを組み合わせた複合橋状突起を付加するものが主体を占める。胴部に渦巻状・クランク状・弧状・剣先状・菱形文、付加「L」字状・弧状沈線文を組み合わせて充填的に施文するもので、連続刺突・押引文を用いるもの(D2・D3種)、3本一組の平行沈線によるもの(H種)、沈線を添わせた隆線によるもの(I1～I5種)、胴部を平行隆線により方形に区画するもの(G1種)がある。頸部に無文帯を設けたり、口縁部と胴部の境を平行沈線・隆線文、交互刺突を加えた平行沈線文で横位に区画するものが多い。

第5章 考古学的考察

IV群1類 (3) SX7 竪穴状遺構、SK274 フラスコ状土坑、SX719 土器埋設遺構などから複数個体が出土しているほか、SI20・22 竪穴住居跡、SK40・43 フラスコ状土坑、SX14 遺物包含層などで 1～数個体がIV群1類 (1)・(2) 類とともに出土している。器形は深鉢 H・K～M・P・W 類の 6 種が確認できる。胴部が円筒形ないしはやや外傾する深鉢 M・P 類が約半数を占め、次いで胴部中位から下部に稜を持つ深鉢 K 類、胴部が外反ないしは直線的に外傾する深鉢 L 類が見られる。口縁部形態は突起付平縁が主体を占め、平縁の比率は小さくなる。文様は平行隆線文を主体に小波状隆線文、連続短沈線文、連続刺突文を多用する。口縁上部に幅狭の文様帯を持ち、「S」字状・渦巻状突起や、横方向に肥大化した複雑な複合橋状突起を付加するものが主体を占める。胴部に渦巻状・クランク状・弧状・菱形文と付加剣先状・菱形状・「L」字状・弧状隆線文を組み合わせて重点的に施文するもの (D4・G2・G3・I6・J1～J4 種) がある。口縁部と胴部の境を無文帯と小波状隆線を加えた平行隆線で横位に区画するものが多く、小型の土器では単に平行隆線によるものも見られる。

V群1類 いわゆる有孔鍔付土器とこれに関連すると考えられる壺 A・脚付壺 A・小型脚付壺 B・小型台付壺 A 類 (A1 種)、浅鉢 E 類・台付浅鉢・台付土器・注口土器 (B1 種) がある。口縁部形態はすべて平縁である。各遺構の出土状況から、脚付壺 A 類・台付浅鉢 (SX717) はⅡ群1類 (2)～Ⅲ群1類 (1)、小型脚付壺 A 類 (SX610) はⅢ群1類 (1)、小型台付壺 A 類 (SK116) はⅢ群1類 (1)～Ⅳ群1類 (1) に伴うものである可能性が考えられる。

V群2類 地文のみを施文する深鉢 D・E・F・I 類、小型深鉢 D 類、小型浅鉢 B1 類 (A1 種)、無文の深鉢 D・N・X 類、小型深鉢 D 類、浅鉢 A1・A2・B2 類、小型浅鉢 B1 類 (B1 種) がある。口縁部形態はほとんどが平縁である。各遺構の出土状況から、A1 種はⅡ群1類 (2)～Ⅳ群1類 (1)、B1 種はⅡ群1類 (2)～Ⅳ群1類 (2) に伴うものである可能性が考えられるが、このうち口縁部の外面に粘土紐の積み上げ痕跡を 1 段残して幅広の折り返し状口縁とするものは、Ⅱ群1類 (2)～Ⅲ群1類 (1) に伴うものと考えられる。

2. 土器群の年代と編年的位置付け

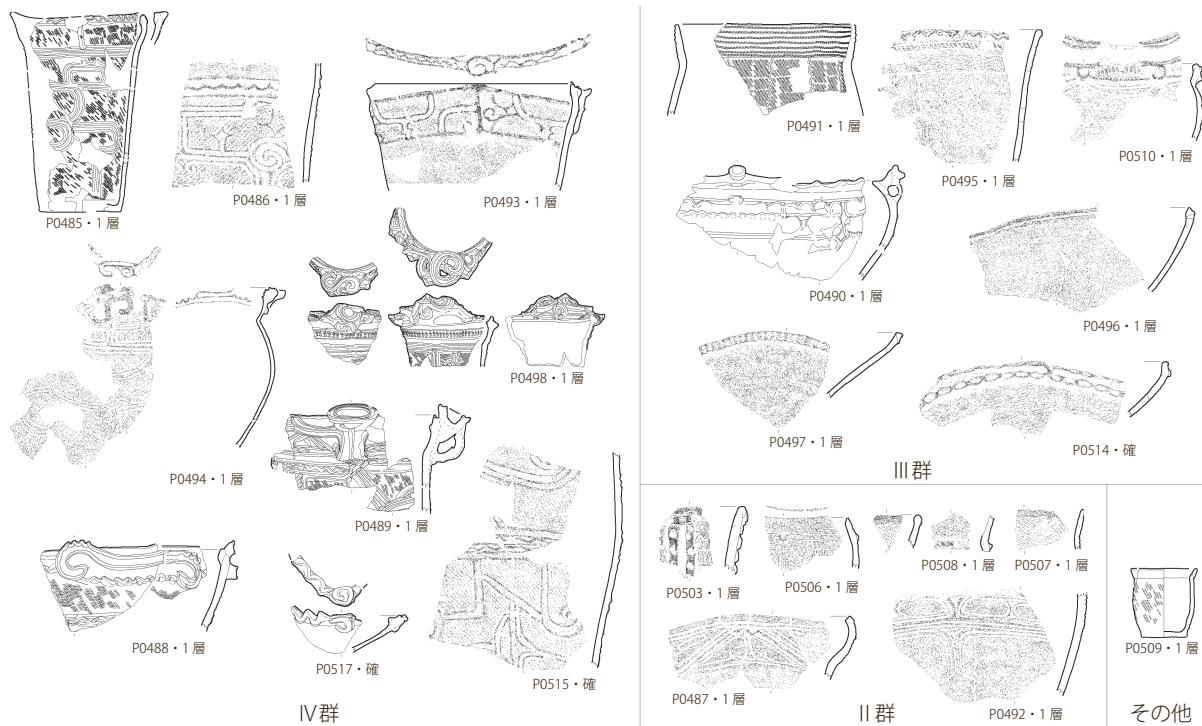
本遺跡出土土器から抽出された I～V群土器を東北地方南部地域の縄文時代の土器編年の中で検討すると、山内清男により型式設定された大木式土器 (山内 1937) の範疇に収まり、I群土器は前期末葉の大木 6 式、II群土器は中期初頭の大木 7a 式、III群土器は中期前葉の大木 7b 式、IV群土器は中期中葉の大木 8a 式、V群土器は大木 7a～8a 式に比定することができる。以下、各土器群の具体的な編年的位置について検討する。なお、以下の文中で「第 2/3 段階」などの記載は「3 段階区分のうちの 2 段階目」であることを示す。

I群1類 [大木6式新段階] 本類に共通する特徴を持つ土器は、七ヶ宿町小梁川遺跡第 I 群土器 (相原 1986, 真山ほか 1987)、涌谷町長根貝塚第 1・2 群土器 (藤沼 1969)、大崎市東要害貝塚第 III 群土器 (三好ほか 2008)、栗原市嘉倉貝塚第 2 群土器 (佐藤 2003) などに見られ、前期末葉の大木 6 式に位置付けられている。

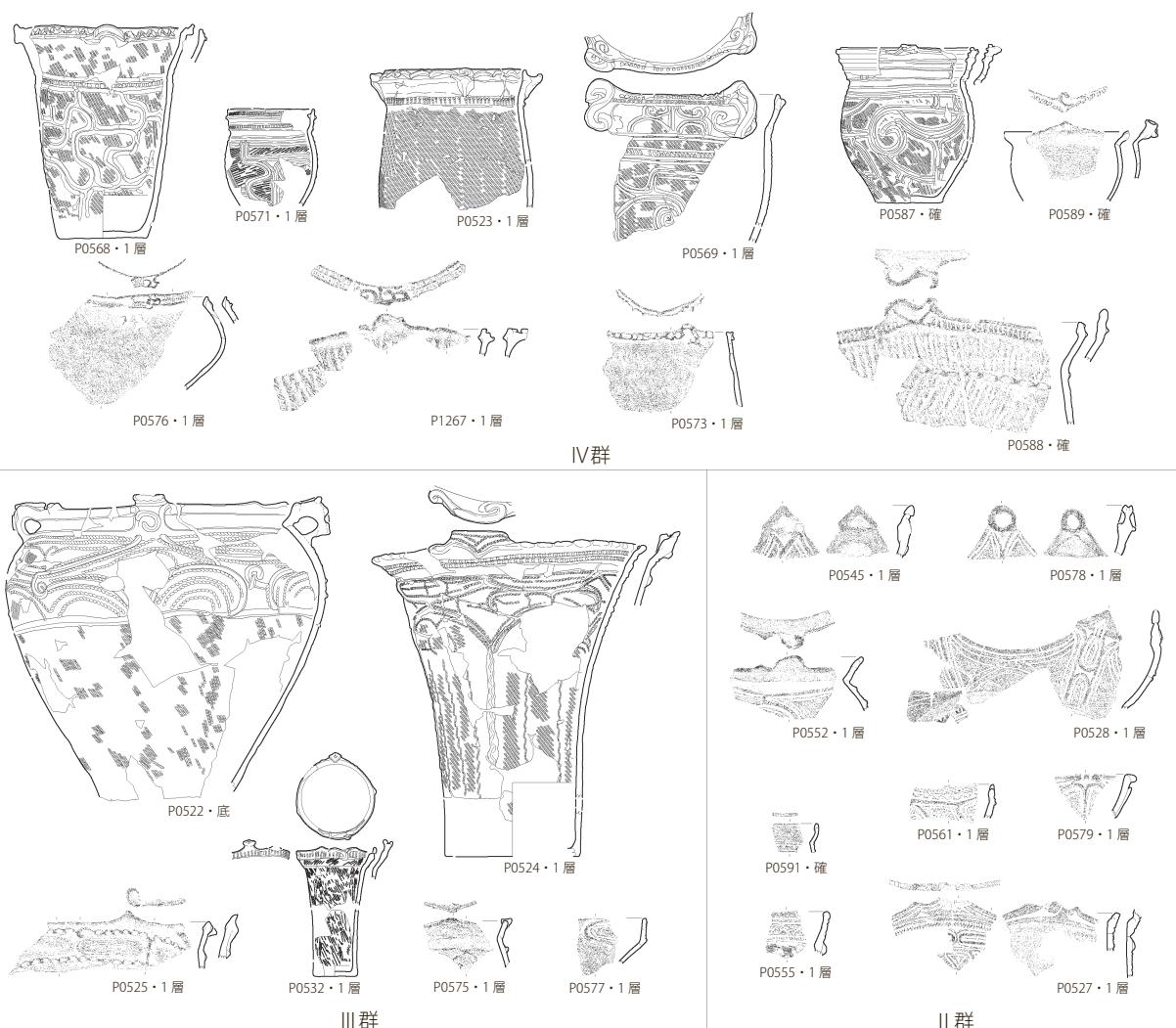
千葉直樹 (2007) は嘉倉貝塚出土土器の検討から大木 6 式を 3 段階に区分しており、これに依拠すると本類は口縁部文様帯における縦位に連続する弧状文や短沈線文の採用から第 3/3 段階に位置付けられる。

I群2類 [十三菩提式 (後葉) 系統] 本類に共通する特徴を持つ土器は、白石市正人壇遺跡 (片倉ほか 1976)、涌谷町長根貝塚 1 群土器 (藤沼 1969) などで前期末葉の大木 6 式に伴って見られ、関東地方の十三菩提式との関係が指摘されている。

今村啓爾 (1974) は東京都登計原遺跡出土土器の検討から十三菩提式を 4 段階に区分しており、これに依拠



第12図 SX14 遺物包含層出土土器



第13図 SX17 遺物包含層出土土器

第5章 考古学的考察

すると本類は鋸歯状あるいは格子状の浮線文、口唇部に巻き付けたような浮線文の採用から第3/4・4/4段階（十三菩提式後葉：今村 1985）の系統に位置付けられる。まとまった出土状況が見られないため、本遺跡における共伴関係は詳らかでないが、上記の類例からI群1類に並行する時期のものと考えられる。本類は出土点数が少なく破片資料が主体のため、器種組成や文様構成およびその地域性について検討することは難しい。

II群1類（1）[大木7a式古段階] 本類に共通する特徴を持つ土器は、七ヶ宿町小梁川遺跡第II群土器（相原 1986）、仙台市山田上ノ台遺跡第VII群土器（主浜 1987）、涌谷町長根貝塚第3群土器（藤沼 1969）、登米市糠塚貝塚上層（加藤 1956）、大崎市東要害貝塚第IV・V群土器（三好ほか 2008）、栗原市嘉倉貝塚第3群土器（佐藤 2003）、福島県磐梯町・猪苗代町法正尻遺跡II群2類土器（松本 1991）などに見られ、縄文時代中期初頭の大木7a式に位置付けられている。

相原淳一（1986）は小梁川遺跡出土土器の検討から大木7a式を2段階（小梁川II・III群）に区分しており、これに依拠すると本類は口縁部文様帶における縦位隆線文あるいは貼付文と充填的な連続「ハ」字状あるいは鋸歯状沈線文の採用から第1/2段階に位置付けられる。宮城県北部を中心に分布する糠塚系統（今村 2010b）の土器で、関東地方の五領ヶ台式前半期との並行関係が明らかになっている。

II群1類（2）[大木7a式新段階] 本類に共通する特徴を持つ土器は、七ヶ宿町小梁川遺跡第III群土器（相原 1986, 真山ほか 1987）、川崎町中ノ内A遺跡第I群土器（古川ほか 1987）、大崎市東要害貝塚第VI群土器（三好ほか 2008）、山形県米沢市台ノ上遺跡A類土器（菊地 1997）、最上町水木田遺跡A群土器（阿部 1984）、福島県福島市大平・後関遺跡II群土器1期（猪狩 1995）、磐梯町・猪苗代町法正尻遺跡II群2類土器（松本 1991）などに見られ、縄文時代中期初頭の大木7a式に位置付けられている。

前述の大木7a式の2段階区分（相原 1986）に依拠すると本類は4単位の大波状縁（波頂部が水平となる截頭波状縁）を持つ深鉢を中心とする器種組成と、隆線文・沈線文・隆線に沿う沈線文・交互刺突文を多用した弧状区画文、上下で対向する弧状区画文のほか押引文・連続刺突文・橢円形貼付文などの採用から第2/2段階に位置付けられる。器種組成や文様構成は近隣の小梁川III群土器、中ノ内I群土器の内容と極めて類似性が高く、本類の系統性や編年的位置はこれらの土器群とほぼ共通するものと理解される。宮城県南部を中心に分布し大木7a式と7b式の古い部分の中核をなすとされる中ノ内系統（今村 2010b）の土器である。

なお、相原淳一（2018b）は小梁川遺跡の再検討において、小梁川III群土器が出土した東側遺物包含層III層の細分層位から上層・下層に区分し、下層に五領ヶ台式後半期系統の土器が伴うことを明らかにし、上層を五領ヶ台式終末期並行期に位置付けている。土器の特徴については下層で見られた截頭波状縁が、上層では大波状縁に発達し、波頂部に貼付文を伴うものが多いことなどを指摘している。これを踏まえると、中ノ内I群には大波状縁の顕著な発達が看取され、五領ヶ台式終末期（東関東：竹ノ下式）系統の土器を一定数伴う（今村 2010b）ことから小梁川遺跡東側遺物包含層III層上層との並行関係が確認できる。本遺跡ではこれらの事実に対応する層位的所見は得られていないが、後述する関東系土器の編年観から見れば、本類は五領ヶ台式後半期系統（II群2類（2））と終末期系統（II群2類（3））の2段階を内包するものと考えられる。

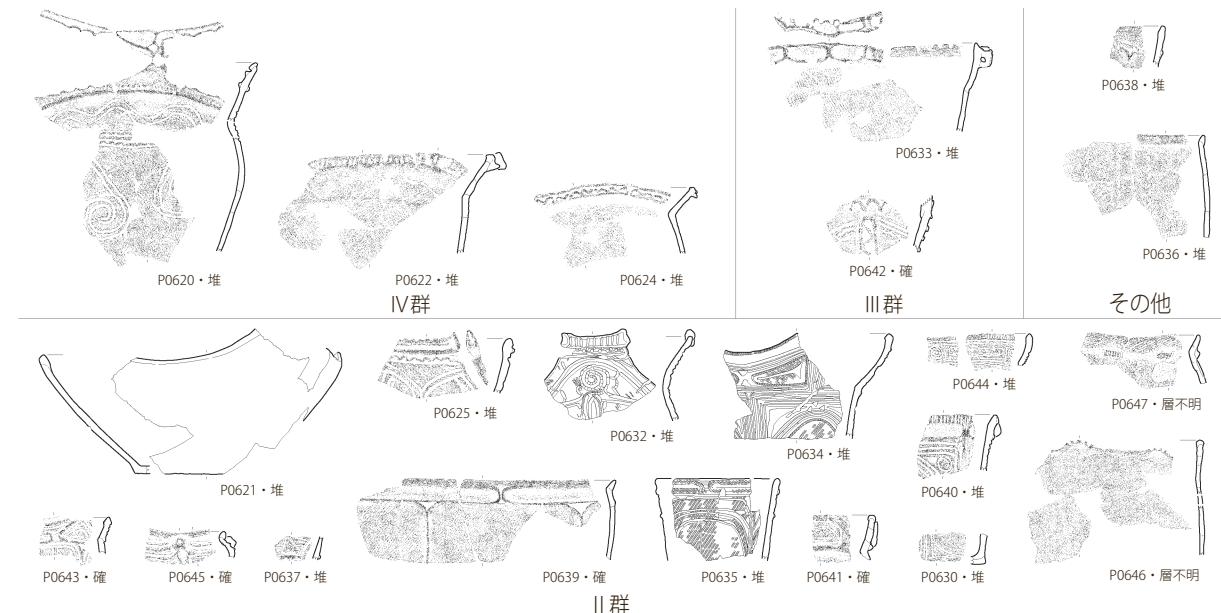
II群2類（1）[五領ヶ台式（前半期）系統] 本類に共通する特徴を持つ土器は、七ヶ宿町小梁川遺跡第II群土器（相原 1986, 真山ほか 1987）、涌谷町長根貝塚第3群土器（藤沼 1969）、福島県磐梯町・猪苗代町法正尻遺跡II群2類土器（松本 1991）などで中期初頭の大木7a式に伴って見られ、関東地方の五領ヶ台式との関係が指摘されている。

今村啓爾（1985）は関東地方と東北地方の中期初頭土器の検討から五領ヶ台式を6段階（五領ヶ台Ia・I

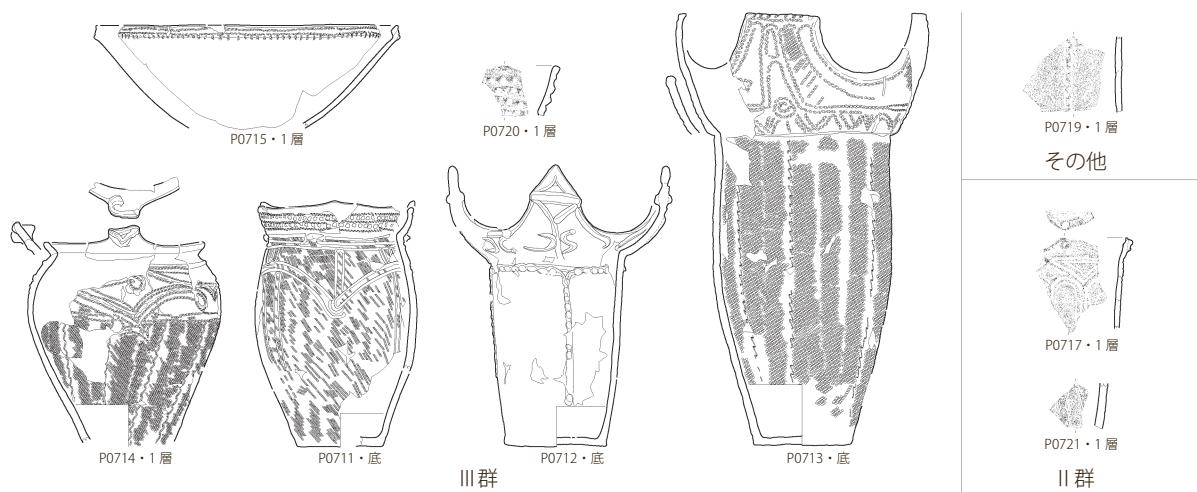
第1節 繩文土器の変遷と地域性

b・II a・II b・II c式、西関東：神谷原式・大石式／東関東：竹ノ下式段階）に区分しており、大別では五領ヶ台I a・I b式が前半期、II a～II c式が後半期、神谷原式・大石式が終末期とされている（山本2008）。これらに依拠すると本類は胴下部が円筒形、胴上部が球形で頸部に括れを持ち口縁部が内弯するとみられる器形で、渦巻状・円形・梯子状の細沈線文と三角形彫去文の採用から五領ヶ台式前半期（I a・I b式期）の系統に位置付けられる。まとまった出土状況が見られないため、本遺跡における共伴関係については詳らかでないが、上記の類例からII群1類（1）に並行する時期のものと考えられる。

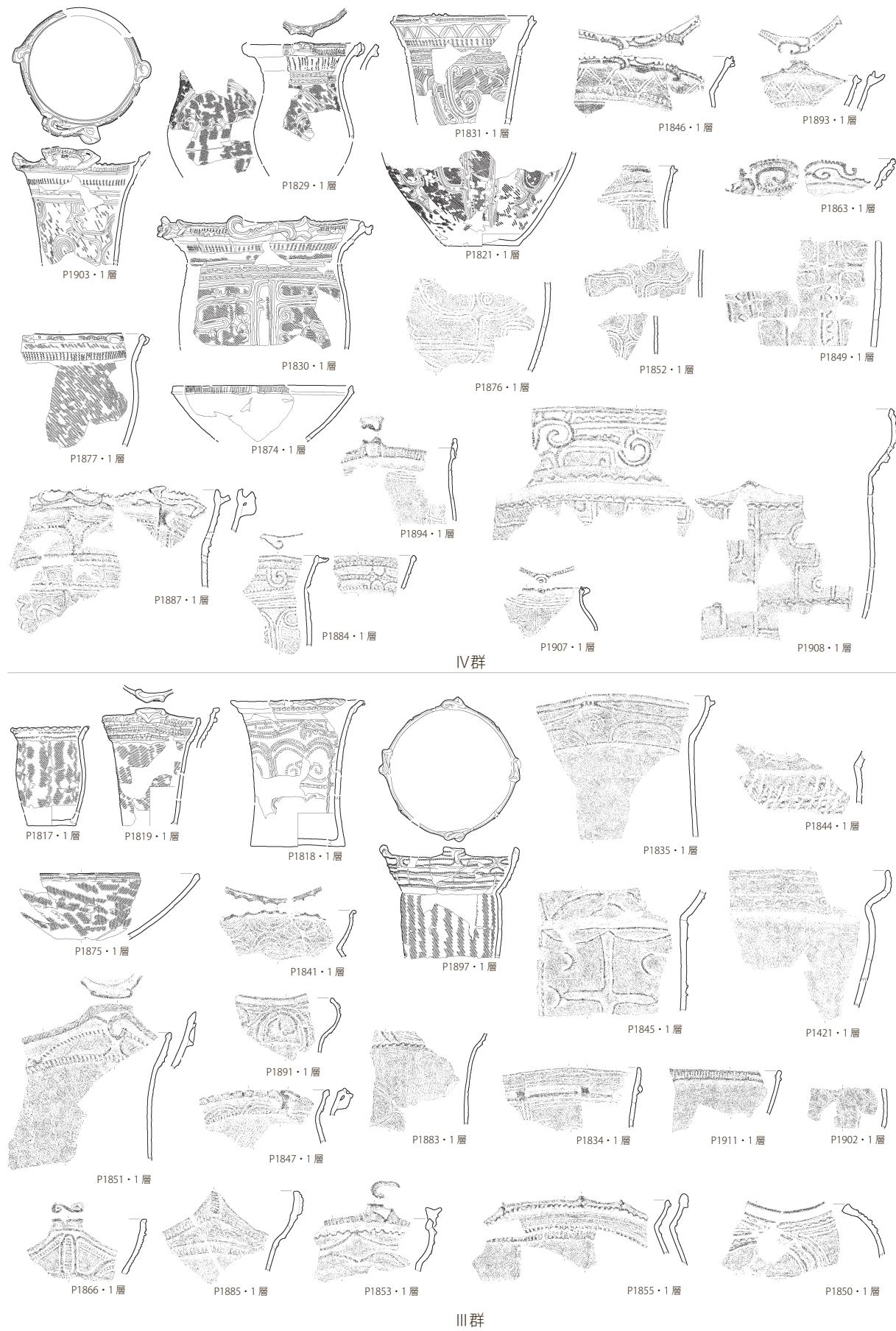
II群2類（2）[五領ヶ台式（後半期）系統] 本類に共通する特徴を持つ土器は、七ヶ宿町小梁川遺跡東側遺物包含層III層下部出土土器（相原2018b）、大崎市東要害貝塚第V・VI群土器（三好ほか2008）、涌谷町長根貝塚第3群土器（藤沼1969）、栗原市嘉倉貝塚第3群土器（佐藤2003）、福島県磐梯町・猪苗代町法正尻遺跡II群2類土器（松本1991）などで中期初頭の大木7a式に伴って見られ、関東地方の五領ヶ台式との関係が指摘されている。



第14図 SX361遺物包含層出土土器



第15図 SX608遺物包含層出土土器



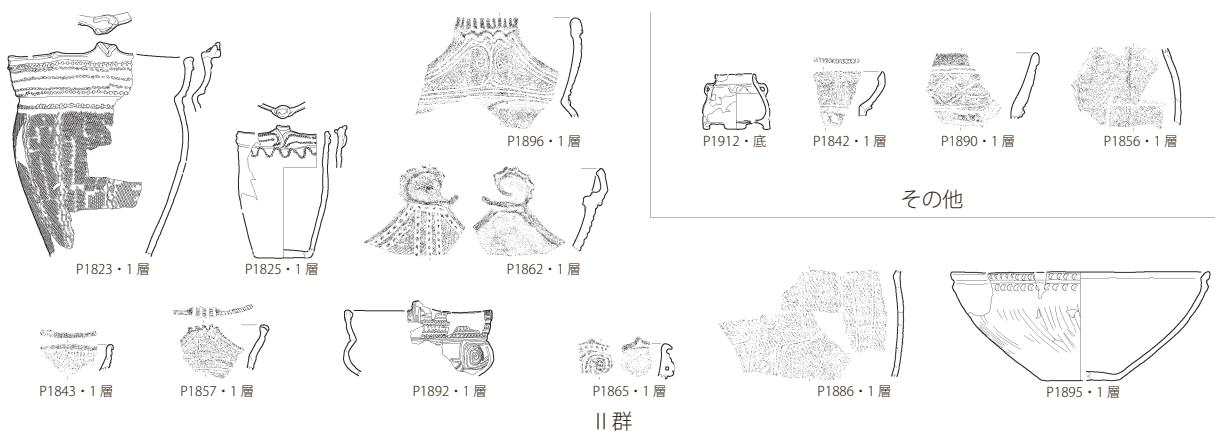
第16図 SX610遺物包含層出土土器（1）

第1節 繩文土器の変遷と地域性

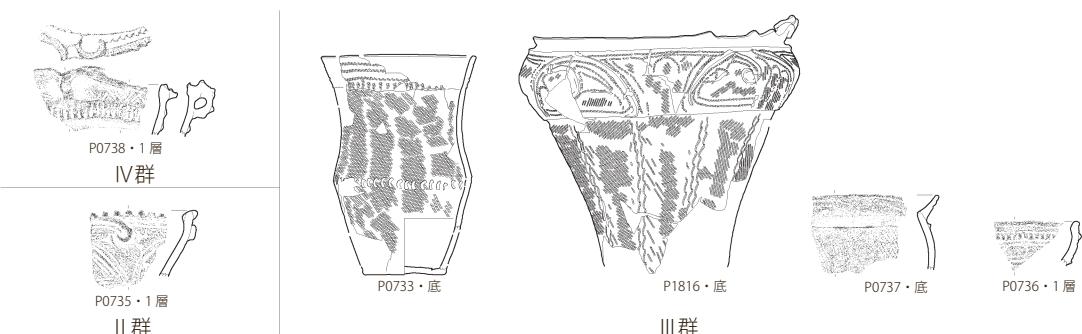
前述の五領ヶ台式の6段階区分（今村 1985）および3段階区分（山本 2008）に依拠すると本類は口縁上端部に刻み目状の短沈線文を多用し、沈線文に沿う半円状の連続刺突文や連続三角形彫去文の採用から五領ヶ台式後半期（II a～II c式期）の系統に位置付けられる。本類のまとめた出土状況は多くないが、SK266・SK315 フラスコ状土坑でII群1類（2）との共伴に近い状況が看取され、後述のII群2類（3）との関係からII群1類（2）の古い段階に並行する時期のものと考えられる。また、SK241 フラスコ状土坑やSK359 土坑では本類を主体とする出土状況が見られる。胎土・焼成とともに在地土器と異質で文様表現の完成度が高く搬入品と考えられる製品（P1162・1674など）を多数認める一方、文様表現が稚拙で前者を模倣した在地製作品と考えられる製品（P1087・1142など）も一定数含まれている。

II群2類（3）[五領ヶ台式（終末期）系統] 本類に共通する特徴を持つ土器は、川崎町中ノ内A遺跡I群土器（古川ほか 1987）、山形県最上町水木田遺跡A群土器（阿部 1984）、福島県福島市大平・後関遺跡II群土器1期（猪狩 1995）、磐梯町・猪苗代町法正尻遺跡II群2類土器（松本 1991）などで中期初頭の大木7a式に伴って見られ、関東地方の五領ヶ台式との関係が指摘されている。

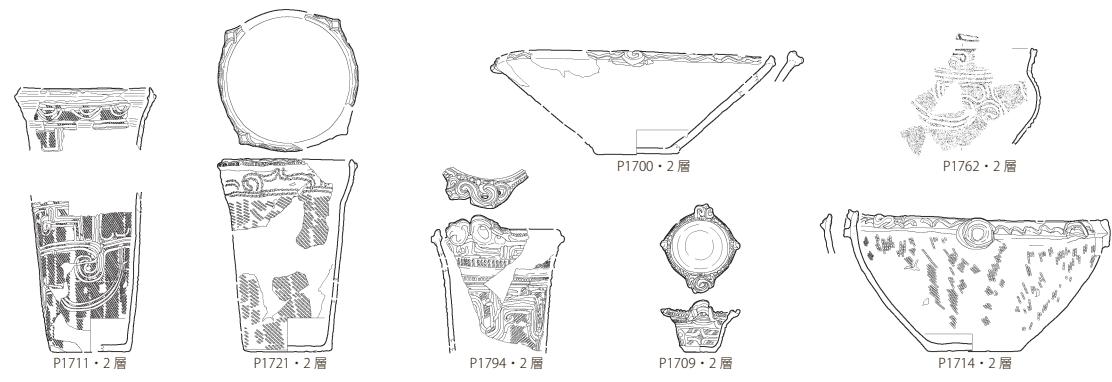
五領ヶ台式の6段階区分（今村 1985）および3段階区分（山本 2008）に依拠すると本類は短く肥厚する口縁部形態と左右非対称な波頂部を持つ波状縁、連続短沈線文・連続刺突文・押引文・三角形彫去文、接点がX字状となる楕円形区画文、Y字状垂下降線文などの採用から五領ヶ台式終末期（東関東：竹ノ下式期）の系統に位置付けられる。SK265 フラスコ状土坑、SK511・SK512・SK614 土坑、SX361 遺物包含層などでII群1類（2）との共伴に近い状況が看取され、既述のII群2類（2）との関係からII群1類（2）の新しい段階に並行する時期のものと考えられる。胎土・焼成とともに在地土器と異質で文様表現の完成度が高く搬入品と考えら



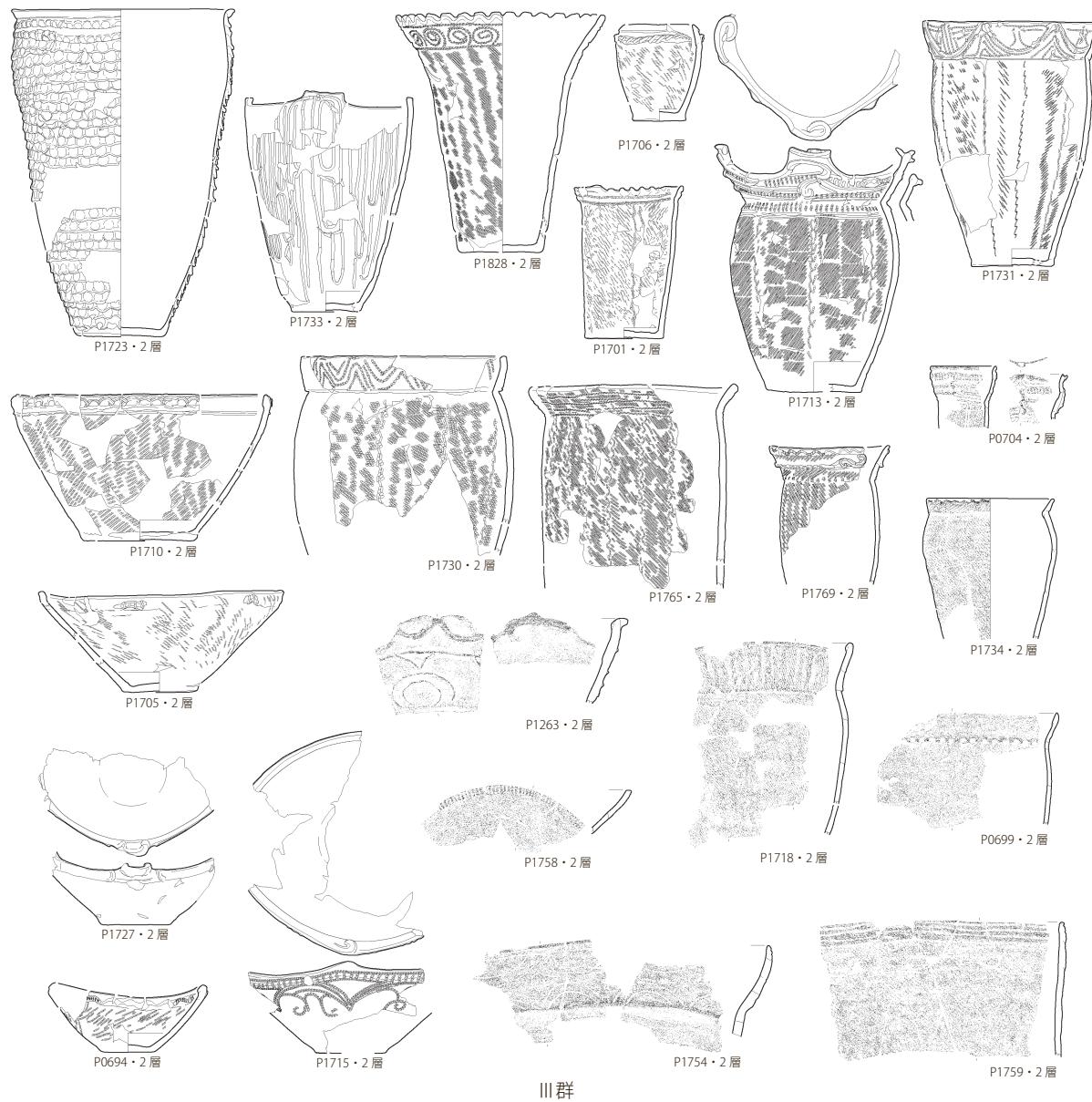
第17図 SX610 遺物包含層出土土器（2）



第18図 SX666 遺物包含層出土土器



IV群



III群

第19図 SX717遺物包含層2層出土土器(1)



第20図 SX717遺物包含層2層出土土器(2)

第5章 考古学的考察

れる製品（P0527・0634・2023・2104・2158など）を多数認める一方、胎土・焼成が在地土器と共に集落内での製作を窺わせるもの（P0176・0640・1192など）も一定数認められる。

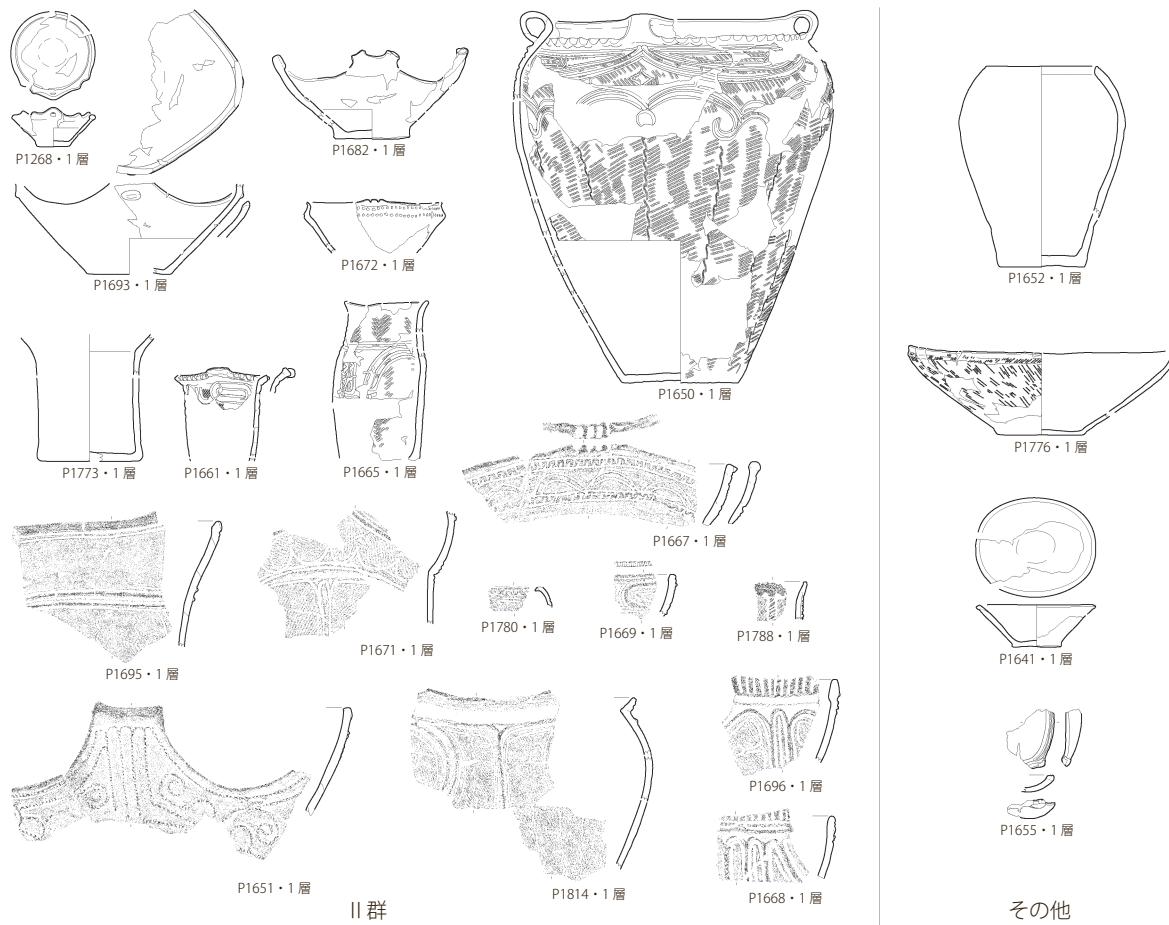
II群 3類 [新保式（後半期）系統] 本類に共通する特徴を持つ土器は、七ヶ宿町小梁川遺跡第Ⅲ群土器（相原 1986, 真山ほか 1987）、山形県米沢市台ノ上遺跡 A 群土器（菊地 1997）、鶴岡市西向遺跡第 1～7 群土器



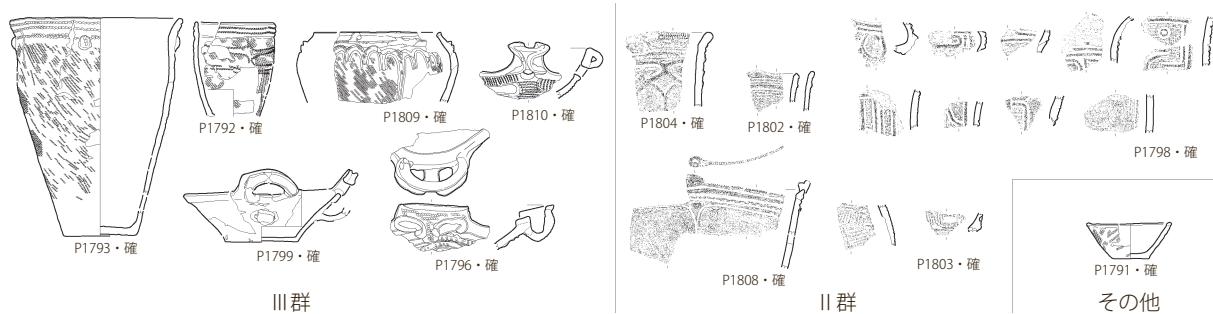
第21図 SX717遺跡 1層出土土器（1）

(須賀井 2004) などで中期初頭の大木 7a 式に伴って見られ、北陸地方の新保・新崎式との関係が指摘されている。

本類は新保式と新崎式の中間的様相を示すとされた石川県中能登町徳前 C 遺跡出土土器（西野ほか 1983）に類似する。加藤三千雄（1988・2008）は新保・新崎式土器様式を 7 段階（第 1 ~ 7 様式）に区分し、大別では第 1 ~ 4 様式が新保式、第 5 ~ 7 様式が新崎式としている。これに依拠すると徳前 C 遺跡出土土器および本類は主に第 3 ~ 4 様式に該当し、新保式後半期系統に位置付けられる。まとめた出土状況が見られないため、本遺跡における共伴関係については詳らかでないが、上記の類例から II 群 1 類（2）に並行する時期のものと考えられる。



第22図 SX717 遺物包含層1層出土土器（2）



第23図 SX717 遺物包含層確認面出土土器

III群1類(1) [大木7b式古段階] 本類に共通する特徴を持つ土器は、七ヶ宿町小梁川遺跡第IV群土器（相原1986、真山ほか1987）、川崎町中ノ内A遺跡第II群土器（古川ほか1987）、山形県最上町水木田遺跡西区B・C群土器（阿部1984）、福島県福島市月崎A遺跡II群A類土器（原ほか1997）、大平・後関遺跡II群土器2・3期（猪狩1995）、磐梯町・猪苗代町法正尻遺跡II群3類土器（松本1991）などに見られ、縄文時代中期前葉の大木7b式に位置付けられている。

相原淳一（1986）は小梁川遺跡出土土器の検討から大木7b式を2段階（小梁川IV・V群）に区分し、中野幸夫（2008b）は福島県域の一括資料に基づき3段階（古・中・新段階）に区分している。これらに依拠すると本類は前段階に見られた弧状区画文、上下で対向する弧状区画文、縦位区画文を踏襲しながら、施文技法において隆線文・押圧縄文・隆線に沿う押圧縄文を多用すること、押引文・交互刺突文・三角形彫去文が少ないことから相原編年：第1/2段階（中野編年：第1/3～2/3段階）に位置付けられる。器種組成や文様構成は近隣の小梁川IV群土器、中ノ内II群土器の内容と極めて類似性が高く、本類の系統性や編年的位置はこれらの土器群とほぼ共通するものと理解される。大木7a式新段階から連続的に変遷する中ノ内系統（今村2010b）の新しい部分に相当する。

なお、低い波状縁のバケツ形の器形で口縁部を刻み目状の連続刺突を加えた隆線で区画し、4～5条の横位平行押圧縄文を施文するP1774は東北北部の円筒下層d式に類例が見られる（三宅1989a、斎藤1991、高木2005）。円筒下層d式は大木6式新段階に並行し（今村2006など）、一部が大木7a式古段階まで降るとする見解もある（松田2004）ことから、I群1類ないしはII群1類（1）に並行する時期のものである可能性がある。このほか、III群1類（1）・（2）、III群3類、IV群1類（1）に分類した土器に見られる文様要素のうち、①間隔を空けて施文した横位平行押圧縄文の間に短い縦位連続押圧縄文を加えるもの（P0495・0736・1047など）、口縁部の上端に施文した中太の粘土紐貼付による小波状隆線に②縦位連続押圧縄文（P0694・1694など）、③鋭い箇状工具による刻み目状の連続短沈線文（P0779・0798・2074・2192など）、④縄文（P0411・1702・2153など）や隆線形状に合わせて押圧縄文（P1439・1516など）を加えるか、⑤加飾しないもの（P0523・1710など）、⑥折り曲げた撚紐の屈曲部による爪形状の縦位連続押圧縄文（P1245・1768など）、⑦半截竹管状工具による爪形状の連続刺突文（P1335・1864など）はそれぞれ大木7a～8a式に並行するとされている円筒上層a式（①）、b式（⑥）、b・c式（②）、c式（③・⑦）、c・d式（⑤）、d式（④）を特徴付けるもので（三宅1989b）、両型式がいくつかの文様要素を共有しながら変遷したことを示すが、上に挙げた本遺跡出土土器においては基本的に大木式系統の器形と文様構成からなり、円筒上層式との直接的な関係を示す個体は積極的には認められない。

III群1類(2) [大木7b式新段階] 本類に共通する特徴を持つ土器は、七ヶ宿町小梁川遺跡第V群土器（相原1986、真山ほか1987）、山形県米沢市台ノ上遺跡B群土器（菊地1997）、最上町水木田遺跡西区D・E群土器（阿部1984）、舟形町西ノ前遺跡第II群土器（黒坂1994）、新庄市中川原C遺跡第2群土器（佐竹2002）、福島県福島市月崎A遺跡II群A類土器（原ほか1997）、飯館村上ノ台A遺跡II群土器（鈴鹿ほか1984）、磐梯町・猪苗代町法正尻遺跡II群4類土器（松本1991）などに見られ、縄文時代中期前葉の大木7b式に位置付けられている。

前述の大木7b式の2段階区分（相原1986）および3段階区分（中野2008b）に依拠すると本類は前段階に見られた弧状区画文、上下で対向する弧状区画文、縦位区画文を踏襲しながら、施文技法において隆線文・押圧縄文・隆線に沿う押圧縄文を多用し、区画の隆線を2本平行させて間に短い縦位連続押圧縄文を施文するもの、口縁部の上部に狭い文様帯を設けて短い縦位連続押圧縄文や「X」字状隆線文を施文するもの、波頂部に橋状把手や「S」字状貼付文が複合するものが見られることから、相原編年：第2/2段階（中野編年：第3/3

段階)に位置付けられる。また、地文の縄文に縦位の指ナデ状条痕文を加えるものが本類と小梁川V群に見られる。器種組成や文様構成は近隣の小梁川V群・上ノ台II群の内容と類似性が高く、山形県域の土器にも類例が多く見られる。本類の系統性や編年的位置はこれらの土器群とほぼ共通するものと理解される。なお、後続する大木8a式に位置付けられている登米市青島貝塚第1号住居跡出土土器(加藤ほか1975, 第6類)には、本類に類似する縦位連続押圧縄文と「X」字状隆線文を施文するものが伴っており連続的な変遷を示している。

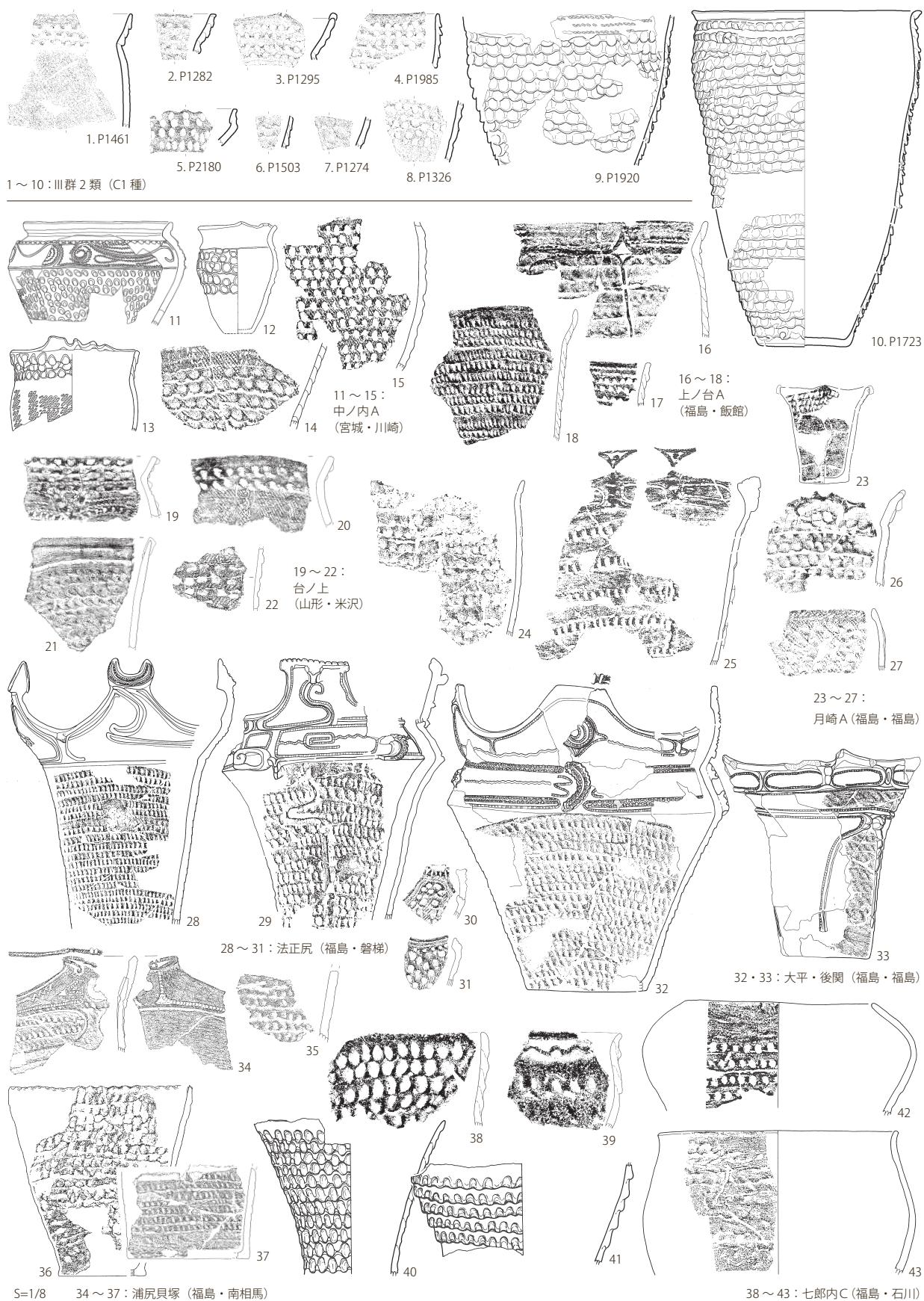
III群2類 [阿玉台式(前半期)系統] 本類に共通する特徴を持つ土器は、七ヶ宿町小梁川遺跡第IV群土器(相原1986, 真山ほか1987)、川崎町中ノ内A遺跡第II群土器(古川ほか1987)、山形県米沢市台ノ上遺跡B群土器(菊地1997・2006)、福島県福島市月崎A遺跡II群A類土器(原ほか1997)、大平・後閼遺跡II群土器2・3期(猪狩1995)、飯館村上ノ台A遺跡第II群土器(鈴鹿ほか1984)、磐梯町・猪苗代町法正尻遺跡II群3類土器(松本1991)、石川町七郎内C遺跡II群土器(松本1982)などで中期前葉の大木7b式に伴って見られ、関東地方の阿玉台式との関係が指摘されている。

西村正衛(1972・1984)は利根川下流域を対象とした一連の編年研究により、阿玉台式を5段階(Ia・Ib・II・III・IV式)に区分している。これに依拠すると本類は大波状縁・平縁の深鉢・浅鉢で構成され、隆線に沿う押引文や沈線文、連続指頭圧痕文、Y字状・小波状垂下隆線文、楕円形区画文、粘土紐の積み上げ痕跡に連続指頭圧痕文を加えて意匠化した文様の採用から阿玉台Ia～Ib式の系統に位置付けられる。SK108・116・196・267 フラスコ状土坑、SK1007土坑、SX608・717遺物包含層でIII群1類(1)との共伴関係が看取され、これに並行する時期のものと考えられる。胎土・焼成ともに在地土器と異質で文様表現の完成度が高く搬入品と考えられる製品(P0166・0889・0775・0904など)を多数認める一方、胎土・焼成が在地土器と共通し集落内での製作を窺わせるもの(P0712・1691・1920など)も一定数認められる。

本類のうち、粘土紐の積み上げ痕跡に連続指頭圧痕文を加えるもの(C1種)は阿玉台式のヒダ状圧痕文に相当するものであるが、第24図1・6・7のように地文に縄文を施文するものや9のように押圧縄文による文様と複合するものが見られる。この種の融合的な土器は近隣の中ノ内II群のほか、福島県の上ノ台II群、月崎II群A類、法正尻II群3類、山形県の台ノ上B群などで見られ、福島県域では阿玉台式との共伴が明瞭である(第24図25・28・29・32・33・34)。第24図13～15・20・22・27・30・31は地文に縄文を施文し、11・16・17・19・30・31は押圧縄文や隆線文による文様と複合するものである。これらは宮城県南部から福島県北部にかけての範囲を中心に分布する地域性を持った一群(以下、関東系亞種と仮称)として、大木7b式古段階の一部を構成する在地の土器と考えられる。

III群3類 [新保式(後半期)系統] 本類に共通する特徴を持つ土器は、III群1類(1)で類例として挙げた土器群のうち七ヶ宿町小梁川遺跡第IV群土器(相原1986, 真山ほか1987)、川崎町中ノ内A遺跡第II群土器(古川ほか1987)、福島県福島市月崎A遺跡II群C類土器(原ほか1997)、山形県最上町水木田遺跡西区B・C群土器(阿部ほか1984)などで見られ、中期前葉の大木7b式古段階に位置付けられる(第25図)。

SX717遺物包含層1層でまとめて出土し、III群1類(1)と共に共伴関係にある。本類の特徴である半截竹管状工具による半隆起線文や押引文、爪形の連続刺突文による施文技法は前段階の土器群においてII群3類として区別したように北陸地方の新保・新崎式との関係が考えられるが、本類は地文に縄文を施文するものや、III群1類(1)で多用される押圧縄文、連続指頭押圧、小波状隆線を併用するものが多く、第25図1・12・22・25・36・44のように複合的な文様構成を取るものも見られる(分類上、III群1類(1)に留め置いたものの中にもP0524・P1191・P1395など本類と複合的なものがある)。本類の半截竹管文による口縁部文様帯への平行施文と、縦位・横位に区画した胴部文様帯に「U」字状・弧状・波状文を配する文様構成に類似したもの



1~10 : 谷地遺跡、11~15 : 宮城県川崎町 中ノ内A遺跡 (宮城県教委 1987a)、16~18 : 福島県飯館村 上ノ台A遺跡 (福島県教委 1990)、19~22 : 山形県米沢市 台ノ上遺跡 (米沢市教委 2006)、23~27 : 福島県福島市 月崎A遺跡 (福島市教委 1997)、28~31 : 福島県磐梯町・猪苗代町 法正尻遺跡 (福島県教委 1991)、32・33 : 福島県福島市 大平・後関遺跡 (福島市教委 1995)、34~37 : 福島県南相馬市 浦尻貝塚 (南相馬市教委 2008)、38~43 : 福島県石川町 七郎内C遺跡 (福島県教委 1982)

第24図 III群2類土器 (C1種) の類例と関連する阿玉台式系統の土器



1～11：谷地遺跡、12～21：宮城県川崎町中ノ内A遺跡（宮城県教委 1987a）、22～34：宮城県七ヶ宿町小梁川遺跡（宮城県教委 1986・1987b）、35～43：福島県福島市月崎A遺跡（福島市教委 1997）、44：山形県最上町水木田遺跡（山形県教委 1984）

第25図 III群3類土器の類例

第5章 考古学的考察

は石川県能登町新保遺跡（小島 1977）、真脇遺跡（加藤 1986）、中能登町徳前 C 遺跡（西野 1983）など主に新保式期（加藤 2008：第 2～4 様式）の土器群に認められるものの、時期的に本類と並行関係にあると考えられる新崎式を特徴付ける「蓮華文」を施文するものは全く認められない。このように本類は、関連が想定される新保・新崎式の編年と時間的な不整合を生じており後出的であること、Ⅲ群 1 類（1）と複合的な特徴を有する土器が一定数認められることから、前段階における新保式系統との接触を契機として成立した在地の土器と考えられる。宮城県南部から福島県北部を中心に山形県内陸部の一部にかけて分布する地域性を持った一群（以下、北陸系亜種と仮称）として、大木 7b 式古段階の一部を構成する在地の土器と考えられる。

IV群 1 類（1）〔大木 8a 式古段階〕 本類に共通する特徴を持つ土器は、仙台市高柳遺跡（佐藤 1995）、上野遺跡（結城 1989、主浜ほか 2010）、登米市青島貝塚第 6 類土器（加藤ほか 1975）、山形県米沢市台ノ上遺跡 C 群土器（菊地 1997）、舟形町西ノ前遺跡第Ⅳ群土器（黒坂 1994）、新庄市中川原 C 遺跡第 3 群土器（佐竹 2002）、福島県福島市月崎 A 遺跡Ⅱ群 A 類土器（原ほか 1997）、西ノ前遺跡Ⅲ群土器（堀江ほか 1998）、飯館村上ノ台 A 遺跡第Ⅲ群 1 類土器（鈴鹿ほか 1984）、白河市南堀切遺跡 5 号住居出土土器（根本 1984）、磐梯町・猪苗代町法正尻遺跡第Ⅱ群 4 類土器（松本 1991）などに見られ、縄文時代中期中葉の大木 8a 式に位置付けられている。

本類は隆線に沿う押圧縄文や上下で対向する弧状文、4 単位の波状口縁など前段階の要素を一部に残しつつ、口縁上部に幅狭の文様帯を設け、「S」字状を基本とする突起を付加するもの、胴部文様帯を区画したり充填的な施文を加えるものなど大木 8a 式の基本となる要素を持つ一群であるが、突起や胴部文様に複数の要素を複雑に組み合わせるものは少なく、胴部の施文は沈線文が主体となっている。口縁上部の構造変化は、前段階に無文帯や「X」字状隆線文、縦位連続押圧縄文が配置されていた口縁上部の文様帯を区画する横位隆線文が口縁上端付近まで押し上げられて幅狭の文様帯となったもので、「X」字状隆線文は施文されなくなり、短い縦位連続押圧縄文や角押・爪形状の連続刺突文を加えるようになる。松本茂（1991）は法正尻遺跡出土土器の検討から大木 8a 式を 4 段階（Ⅱ群 4 類（2）、Ⅲ群 1 類（1）～（3））に区分し、大別では関東地方の阿玉台Ⅲ式に並行する古段階と阿玉台Ⅳ式に並行する新段階の 2 段階に区分されている（中野 2008b）。これらに依拠すると本類は松本編年：第 1/4 段階（中野編年：第 1/2 段階主体）に位置付けられる。器種組成や文様構成は上記した類例と概ね共通のものである。このうち口縁部文様帯に縦位連続押圧縄文や連弧状・鋸歯状沈線文を施文するものは比較的広範に認められるが、宮城・山形県域に類例が多い。口縁～胴部文様帯に角押状の連続刺突文や押引文を多用する土器は南堀切 5 住、法正尻Ⅱ群 4 類など福島県域に類例が多く見られ、その中でも本類には単位を意識した几帳面な区画を施文するものが目立つ。また、胴部文様帯に縦位の長方形または逆「U」字形の区画文を施文して器面を四分割するものが見られる。前段階に認められた地文の縄文に縦位の指ナデ状条痕文を加えるものは本類でより顕著に認められる。小梁川遺跡、高柳遺跡、福島県西ノ前Ⅲ群に類例が見られ、大木 7b 式新段階～8a 式古段階の宮城県南部から福島県北部に発現する地域性を持った土器の一つ（以下、在地系亜種と仮称）と考えられる。

IV群 1 類（2）〔大木 8a 式中段階（古相）〕 本類に共通する特徴を持つ土器は、七ヶ宿町小梁川遺跡第Ⅵ群土器（真山ほか 1987）、仙台市高柳遺跡（佐藤 1995）、上野遺跡（結城ほか 1989、主浜ほか 2010）、山形県米沢市台ノ上遺跡 C 群土器（菊地 1997）、舟形町西ノ前遺跡第Ⅳ群土器（黒坂 1994）、新庄市中川原 C 遺跡第 3 群土器（佐竹 2002）、福島県磐梯町・猪苗代町法正尻遺跡Ⅲ群 1 類（1）（松本 1991）、南会津町上ノ台遺跡第Ⅲ群 3 類土器（長島ほか 1992）などに見られ、縄文時代中期中葉の大木 8a 式に位置付けられている。

前述の大木 8a 式の 4 段階区分（松本 1991）および 2 段階区分（中野 2008b）に依拠すると本類は「S」字

状に渦巻文などを組み合わせた立体的な複合橋状突起を付加するものがあり、胴部文様帯に3本一組の沈線または沈線を添わせた隆線によって渦巻状・クランク状・弧状・剣先状・菱形文などを複数組み合わせた単位性の不明瞭な文様を充填的に施文するものが主体であることから、松本編年：第2/4段階（中野編年：第2/2段階）に位置付けられる。ただし本遺跡では後述するIV群1類（3）（松本編年：第3/4段階）が本類と共に伴関係にあり時期区分としては適用し難いことから、これらを一括して大木8a式中段階として捉え、その中で本類は型式学的に古相を示すものと考えておく。器種組成や文様構成は上記した類例と概ね共通のものである。円筒形を基調とする直線的な胴部と内弯気味に外傾する口縁部を持つ深鉢が多くを占め、隆線に沈線を添わせる几帳面な施文が目立つ。前段階で見られた口縁部文様帯に縦位連続押圧縄文や連弧状・鋸歯状沈線文を施文するものは依然として多く認められる。胴部文様帯に縦位の長方形または逆「U」字形の区画文を施文して器面を四分割するものも引き続き認められるが、区画の間を充填的な施文で埋めるものが主体となっている。

IV群1類（3）【大木8a式中段階（新相）】 本類に共通する特徴を持つ土器は、七ヶ宿町小梁川遺跡第VI群土器（真山ほか1987）、仙台市高柳遺跡（佐藤1995）、上野遺跡（結城1989、主浜ほか2010）、山形県舟形町西ノ前遺跡第IV群土器（黒坂1994）、福島県福島市月崎A遺跡II群B類土器a種（原ほか1997）などに見られ、縄文時代中期中葉の大木8a式に位置付けられている。

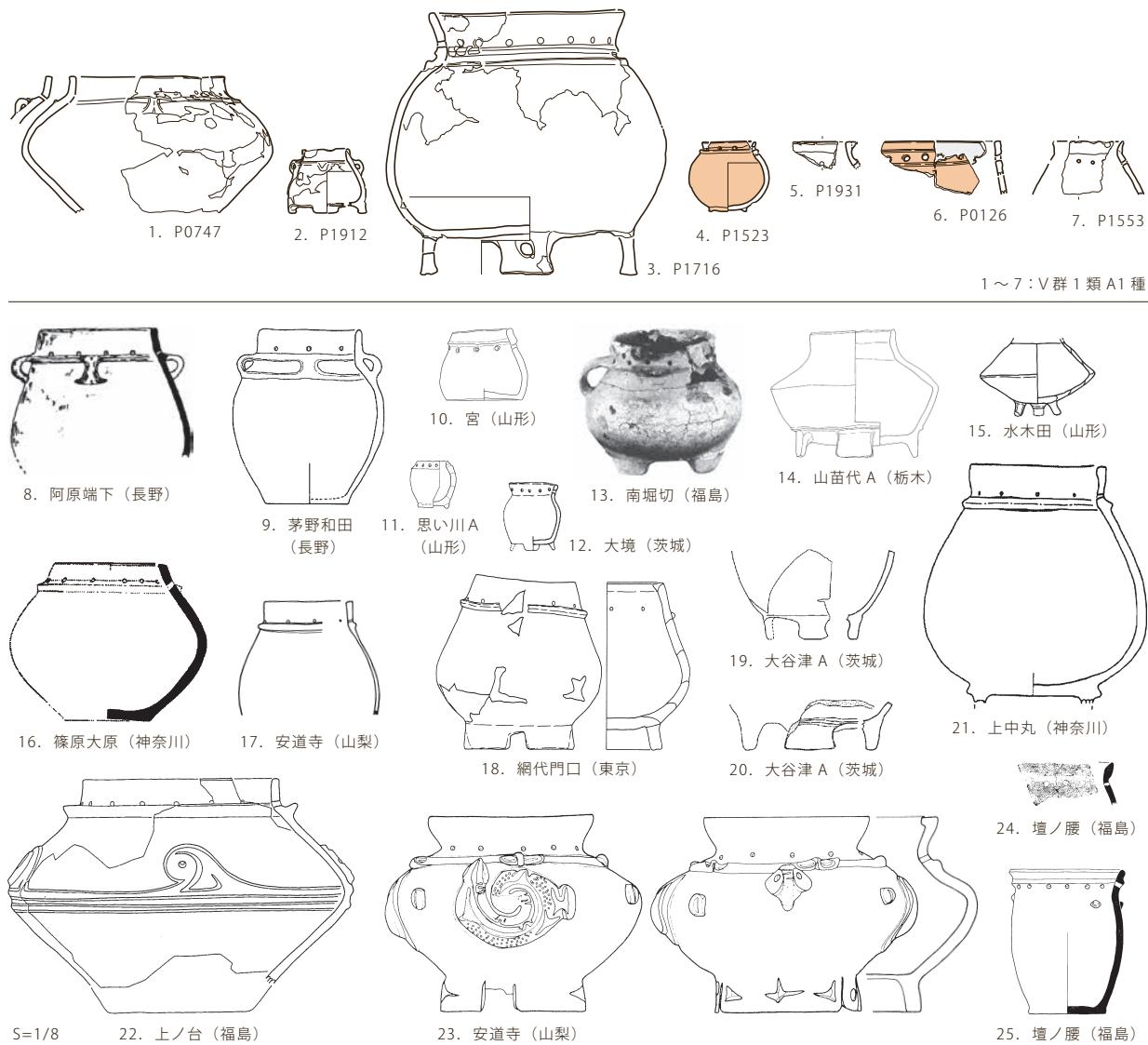
前述の大木8a式の4段階区分（松本1991）および2段階区分（中野2008b）に依拠すると本類は「S」字状・渦巻状・弧状文を複雑に組み合わせた立体的な複合橋状突起が口縁部文様帯を圧迫しながら横方向に肥大化したものがあり、胴部文様帯に細い粘土紐貼付で両脇を調整しない2・3本一組の隆線によって渦巻状・クランク状・弧状・剣先状・菱形文などを複数組み合わせた単位性の不明瞭な文様を充填的に施文し、口縁部と胴部文様帯の境を無文帯と小波状隆線を加えた平行隆線で区画するものが主体となることから、松本編年：第3/4段階（中野編年：第2/2段階）に位置付けられる。ただし前述の通り本遺跡ではIV群1類（2）：第2/4段階と共に伴関係にあり時期区分としては適用し難いことから、これらを一括して大木8a式中段階として捉え、その中で本類は型式学的に新相を示すものと考えておく。器種組成や文様構成は上記した類例と概ね共通のものである。前段階と比較して口縁部の内弯志向が強まり、直線的に外傾するものは見られなくなる。しかし、後続する第4/4段階に見られるような、強く内弯する口縁部に最大径を持ち、胴上部が滑らかな曲線状に括れるキャリパー形の深鉢は本遺跡では見られず、大木8b式に近い文様構成を取るものも積極的には認められない。

V群1類 本類A1種としたもので平口縁に鍔状隆線と小孔を巡らせる壺形の土器は、縄文時代中期の中部地方を中心に関東・東北地方に広く分布し有孔鍔付土器と呼ばれているものである。

有孔鍔付土器の分布と変遷について検討した阿部昭典（2008）によれば、縄文時代中期初頭の五領ヶ台式期に中部高地で出現し、中期前葉～中葉の勝坂式（阿玉台式）期に発展し分布を広げた。出現期のものは長野県富士見町阿原端下遺跡（第26図8）、茅野市茅野和田遺跡（第26図9）などに見られる。胴部が無文の簡素な造形で橋状突起を持つものがあり、これに相当する特徴を持つP0747・1912（第26図1・2）は五領ヶ台式期に位置付けられる可能性がある。また、これを含めて本類A1種はいずれも胴部が無文で文様を持つものではなく、器面に入念なミガキ調整を加え、赤色・黒色塗彩を施すものも見られる。1は胴部中位が算盤玉状に屈曲するもので、類似する器形は福島県南会津町上ノ台遺跡（第26図22）、山梨県甲州市安道寺遺跡（第26図23）などに見られるが、22は胴部中位の屈曲部に幅広の平行隆線を巡らせ、その上位に立体的な玉抱き状のモチーフを、23は胴部上半に蛇とみられる立体的なモチーフを施文する。こうした立体的なモチーフを施文するものは本類には認められない。2は胴部下位が膨らみ口縁部が直立する壺形で4足の短い脚部を持つ小型品で、類例は山形県長井市宮遺跡（第26図10）、茨城県つくば市大境遺跡（第26図12）、福島県白河市南

第5章 考古学的考察

堀切遺跡（第26図13）、栃木県矢板市山苗代A遺跡（第26図14）などに見られる。これらと類似する器形で大型のP1716（第26図3）は円形の透かし孔のある4足の脚部を持つ。類例は少なく管見の限りでは山梨県安道寺遺跡（第26図23）のほか、脚部に透かし孔は持たないが東京都あきる野市網代門口遺跡（第26図18）、茨城県つくばみらい市大谷津A遺跡の2例（第26図19・20）、神奈川県相模原市上中丸遺跡（第26図21）に見られ、口縁～体部は21、脚部は19・20に類似する。P1523（第26図4）は球胴状を呈する小型品で、類例は山形県上山市思い川A遺跡（第26図11）、神奈川県横浜市篠原大原遺跡（第26図16）、相模原市上中丸遺跡（第26図21）、山梨県安道寺遺跡（第26図17）などに見られる。P1553（第26図7）は鍔状隆帯を持たず折り返し口縁の直下に小孔を巡らせるもので、福島県郡山市壇ノ腰遺跡（第26図24）に類例が見



1～7：谷地遺跡、8：長野県富士見町阿原端下遺跡1号住居跡（五領ヶ台式期、富士見町教委1976）、9：長野県茅野市茅野和田遺跡5号特殊遺構（五領ヶ台式期、茅野市教委1970）、10：山形県長井市宮遺跡（大木7b式期、菅原2019）、11：山形県上山市思い川A遺跡（大木7b～8a式期、山形県教委1981）、12：茨城県つくば市大境遺跡24号住居跡（阿玉台II式期、茨城県教育財団1986）、13：福島県白河市南堀切遺跡（大木8a式期、福島県立博物館1991）、14：栃木県矢板市山苗代A遺跡第19号土坑（阿玉台I b～II式期、栃木県教委1996）、15：山形県最上町水木田遺跡包含層III層（大木7b式期、山形県教委1984）、16：神奈川県横浜市篠原大原遺跡6号住居跡（勝坂3b式期、かながわ考古学財団2004）、17：山梨県甲州市安道寺遺跡21号住居跡（井戸尻I式期、山梨県教委1978）、18：東京都あきる野市網代門口遺跡SX04土坑（勝坂3b式期、東京都網代母子寮遺跡調査会1997）、19：茨城県つくばみらい市大谷津A遺跡、20：大谷津A遺跡50号住居跡（阿玉台式期、茨城県教育財団1985）、21：神奈川県相模原市上中丸遺跡38号住居跡（勝坂3a式期、相模原市当麻・下溝遺跡群調査会1994）、22：福島県南会津町上ノ台遺跡包含層L VII層（大木8a式期、福島県立博物館1992）、23：山梨県甲州市安道寺遺跡8号住居跡（井戸尻I式期、山梨県教委1978）、24・25：福島県郡山市壇ノ腰遺跡（大木7b式期、福島県教委1975a）

第26図 V群1類土器（A1種）の類例と関連する有孔鍔付土器

られる。以上の通り管見の限りで参照したいくつかの類例から、本類A1種は中部・関東地方における縩文時代中期初頭の五領ヶ台式、中期前葉～中葉の井戸尻・勝坂・阿玉台式に関連する異系統の土器と考えられる。

阿部（2008）による総合的な検討と南関東地方の事例集成（中山2008、副島2010）によれば、中期前葉～中葉の有孔鍔付土器は長胴樽形、短頸壺形、円筒形の器形に大別され、中部地方では定型化された長胴樽形を主体に多様な器形が展開するが、関東地方では短頸壺形を主体に定型化が進行するという違いが読み取れる。本類A1種は短頸壺形の器形で占められており、胎土・器面調整・焼成状態の類似するものがⅡ群2類（2）・（3）、Ⅲ群2類の浅鉢などに見られることから、関東地方の五領ヶ台・阿玉台式系統の土器に伴ったものと考えられるが、関東地方における五領ヶ台式期の類例は知られていないため、類例の増加を待って検討を加える必要がある。

本類B1種については全体を把握できるものがないため、資料の提示に留める。

V群2類 本類は無文または地文のみを施文する粗製土器で、既述のI～IV群との関係を明確にできることから一括したものである。

本類の中で、口縁部の外面に粘土紐の積み上げ痕跡を1段残して幅広の折り返し状口縁とするものは、Ⅱ群1・2類およびⅢ群1類の中にも多数認められ、横位平行押圧縩文や連続刺突文、連続指頭状押圧文を伴うものがある。これらに共通する特徴を持つ土器は、七ヶ宿町小梁川遺跡Ⅲ・Ⅳ群土器（相原1986、真山ほか1987）、川崎町中ノ内遺跡I群土器（古川ほか1987）にも多数認められ、大木7a・7b式に位置付けられている。前述の段階区分（相原1986）では大木7a式第2/2段階～大木7b式第1/2段階に位置付けられる。

なお、この種の土器は東関東地方から福島県沿岸部にかけての五領ヶ台I・II式並行期に伴う下小野系粗製土器（今村2010a）に類似する。福島県南相馬市浦尻貝塚（川田・佐川2008）では五領ヶ台I・II式並行期に伴うことか確かめられているが、前述の宮城県域の類似事例は五領ヶ台II式に後続する竹ノ下式および阿玉台Ia式並行期に位置付けられるもので、時間的な不整合を生じており後出的であることから直接的な関係性については否定されている（今村2010a）。なお、これに類似する現象は、記述の通り大木7b式第1/2段階における北陸系亞種として理解したⅢ群3類においても確認されている。

3. 土器群の時期設定と地域性

各土器群の編年的位置と並行関係を整理すると、大木6式新段階から大木8a式中段階にかけての7時期に区分することができる。以下、各時期の土器群の構成と地域性について検討する。

1期：大木6式新段階（第27図上段） I群1類「大木6式新段階」とI群2類「十三菩提式（後葉）系統」の土器で構成される。大木6式新段階の土器には、縦位・円盤状の貼付文とそれを中心とする弧状沈線文を組み合わせた文様を主体とする宮城県北部地域と、弧状沈線文よりも鋸歯状あるいは菱形沈線文などが主体となる南部地域にそれぞれ地域性が認められている（相原1986、千葉2007）。本遺跡では縦位・橢円形貼付文と弧状・縦位沈線文が見られるが、出土点数が少なく破片資料が主体のため、器種組成や文様構成およびその地域性について検討することは難しい。十三菩提式（後葉）系統の土器も同様に出土点数が少なく破片資料が主体となっている。

2-1期：大木7a式古段階（第27図下段） II群1類（1）「大木7a式古段階（糠塚系統）」とII群2類（1）「五領ヶ台式（前半期）系統」の土器で構成される。宮城県北部の長根貝塚第3群土器では五領ヶ台式系統が在地の糠塚系統の土器とセットを成すのに対して、近隣の小梁川遺跡第II群、福島県西部の法正尻遺跡II群2

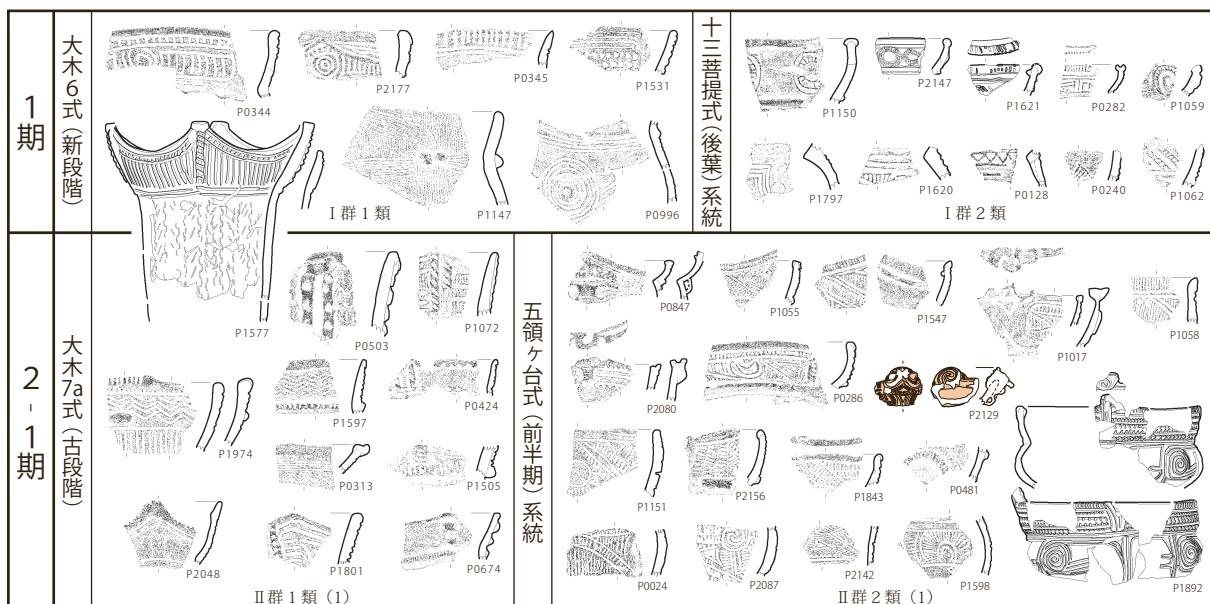
第5章 考古学的考察

類土器では五領ヶ台式系統の土器が主体となっており、宮城県南部以南では五領ヶ台I a式系統の土器が主体を占めて分布したと考えられている（松本 1991）。本遺跡ではいずれも出土点数が少なく破片資料が主体のため、器種組成や文様構成およびその地域性について検討することは難しいが、分類できた破片数で見ると糠塚系統 28 点、五領ヶ台式系統 34 点で概ね半々の比率となっている。

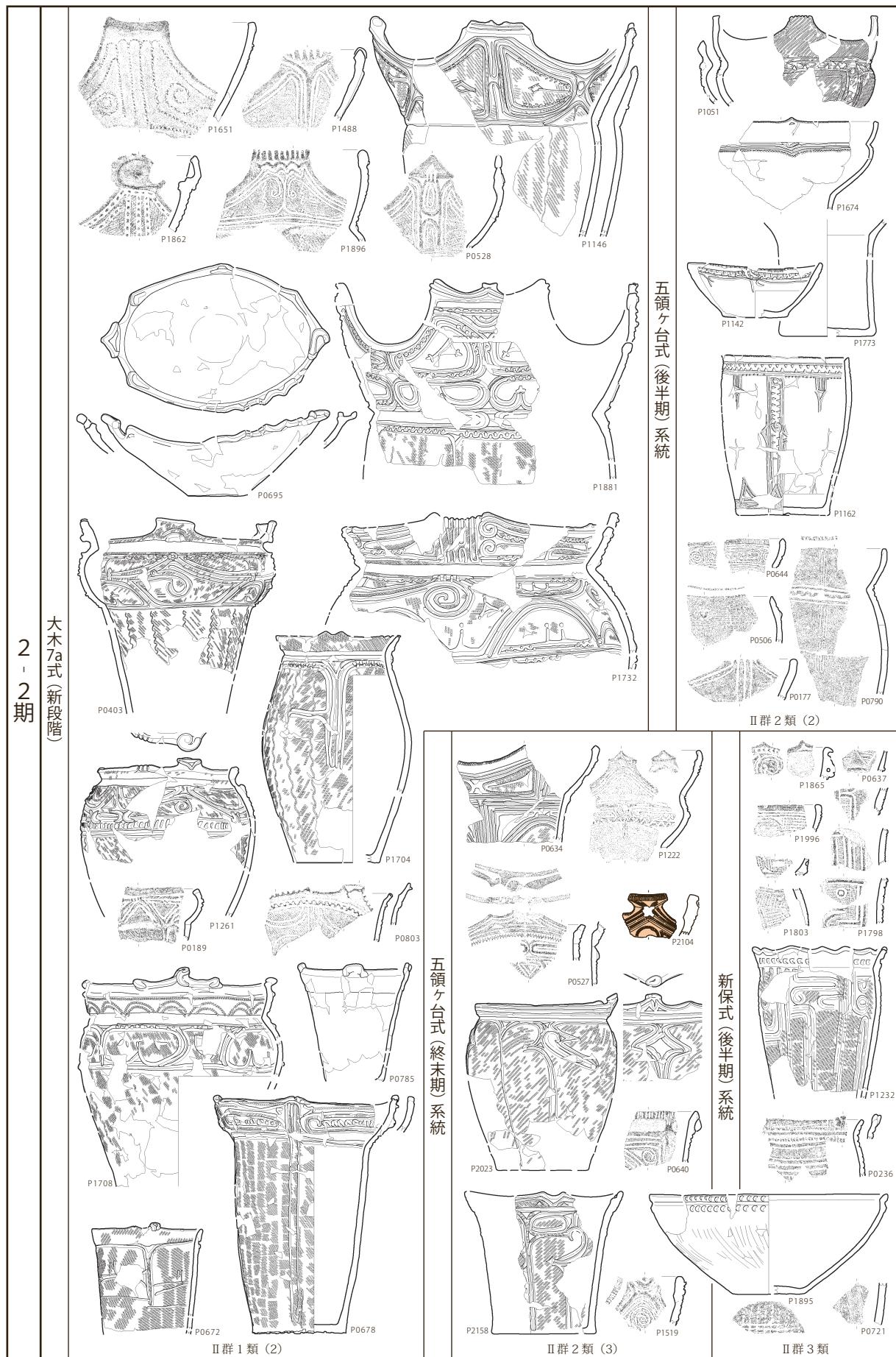
2-2期：大木7a式新段階（第28図） II群1類（2）[大木7a式新段階（中ノ内系統）]とII群2類（2）・（3）

[五領ヶ台式（後半期・終末期）系統]、II群3類[新保式（後半期）系統]の土器で構成される。関東系土器の編年觀から2段階（2-2a期：五領ヶ台式後半期並行、2-2b期：五領ヶ台式終末期並行）に細分できる可能性がある。中ノ内系統の土器は截頭波状縁が発達し、垂下隆線文や沈線を添わせた隆線による弧状区画文、交互刺突文などに特徴付けられるもので、近隣の小梁川遺跡III群土器（2-2a・b期）および中ノ内A遺跡I群土器（2-2b期）の内容と極めて類似性が高く宮城県南部に明瞭な分布域を形成している。宮城県北部では長根貝塚第III群土器、嘉倉貝塚第3群土器、東要害貝塚VI群土器が五領ヶ台式前半期～後半期（2-1～2-2a期）に並行し、長根III群・嘉倉3群は糠塚系統の土器である。東要害VI群では中ノ内系統類似の土器が見られるが截頭波状縁や交互刺突文を欠いている（三好ほか 2008）。本遺跡においては、糠塚系統と五領ヶ台式系統の共伴関係は確認できない。福島県域の法正尻遺跡II群2類（2）は五領ヶ台式系統の土器を主体とし、大木式系統の土器そのものが極めて少ない（松本 1991）。本遺跡の在り方は宮城県北部と福島県域の中間的様相を示し、小梁川III群および中ノ内I群とほぼ同じであるが、SK241 フラスコ状土坑やSK359 土坑で五領ヶ台式後半期系統の土器を主体とする出土状況が見られる。これを積極的に評価するならば、糠塚系統の土器が消失し、截頭波状縁と隆線文・沈線文・交互刺突文を特徴とする土器も未発達な状況下で五領ヶ台式系統の土器が比較的多くを占めた段階を想定し、中ノ内系統を生み出す母体になったと考えることも可能であろう。

3-1期：大木7b式古段階（第29図） III群1類（1）[大木7b式古段階（中ノ内系統）]とIII群2類[阿玉台式（前半期）系統]、III群3類[大木7b式古段階（北陸系亞種）]の土器で構成される。関東系土器の編年觀から2段階（3-1a期：阿玉台I a式並行、3-1b期：阿玉台I b式並行）に細分できる可能性がある。中ノ内系統の土器は前段階から連続的に変遷し、截頭波状縁の扁平化と各種貼付文・突起の付加、弧状区画文の踏襲と

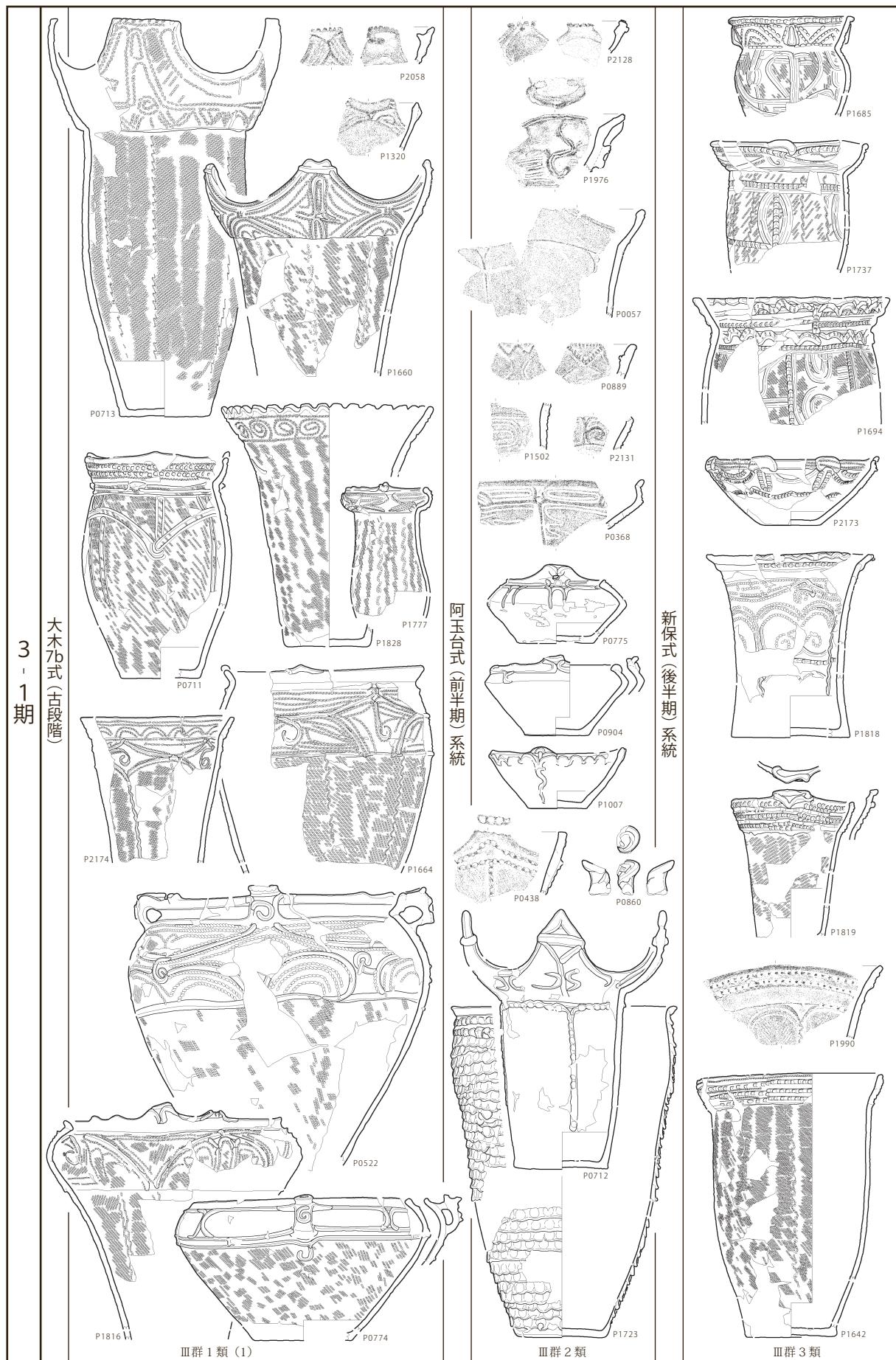


第27図 谷地遺跡出土土器変遷図（1）



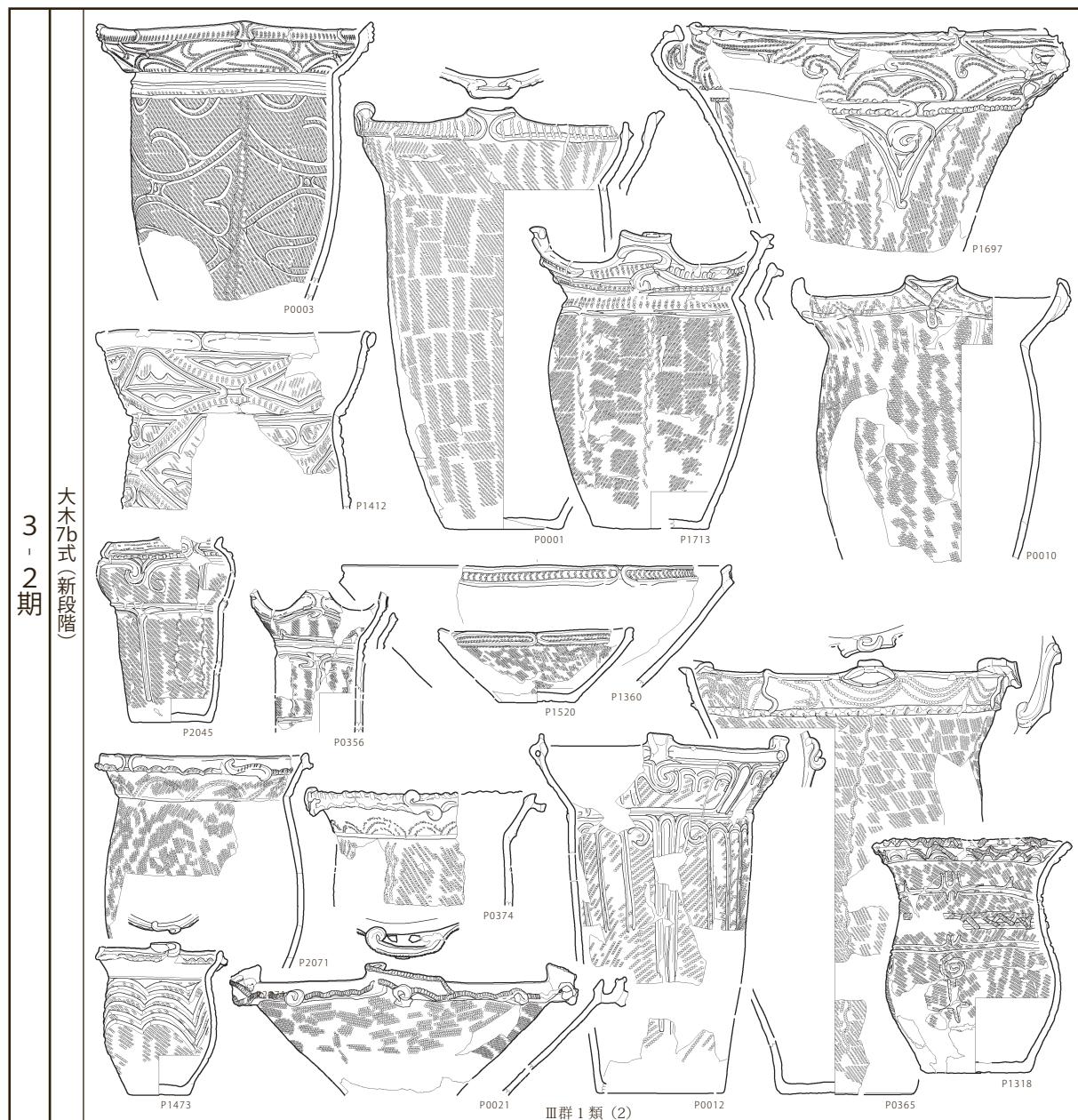
第28図 谷地遺跡出土土器変遷図 (2)

3
-
1
期



第29図 谷地遺跡出土土器変遷図 (3)

押圧縄文の多用、交互刺突文の減少などに特徴付けられるもので、近隣の小梁川遺跡Ⅲ群土器（2-2a・b期）および中ノ内A遺跡I群土器（2-2b期）の内容と極めて類似性が高く宮城県南部を中心とした前段階より広範な地域に分布域を形成している。阿玉台式系統の土器のうち、粘土紐の積み上げ痕跡に連続指頭圧痕文を加えるものには、地文に縄文を施文するものや押圧縄文などによる文様と複合するものが認められる。こうした土器は阿玉台式のヒダ状圧痕文と大木7b式との接触により成立した在地の土器（関東系亞種）と考えられる。また、地文に縄文を施文し押圧縄文などとともに半截竹管文を多用する土器は前段階の新保式と大木7a式との接触により成立した在地の土器（北陸系亞種）と考えられる。これらの関東系・北陸系亞種とした土器は宮城県南部から福島県北部を中心に分布域を形成する。このような地域性を持った融合型式の発現は大木7b式期の特色の一つと言えるものである。



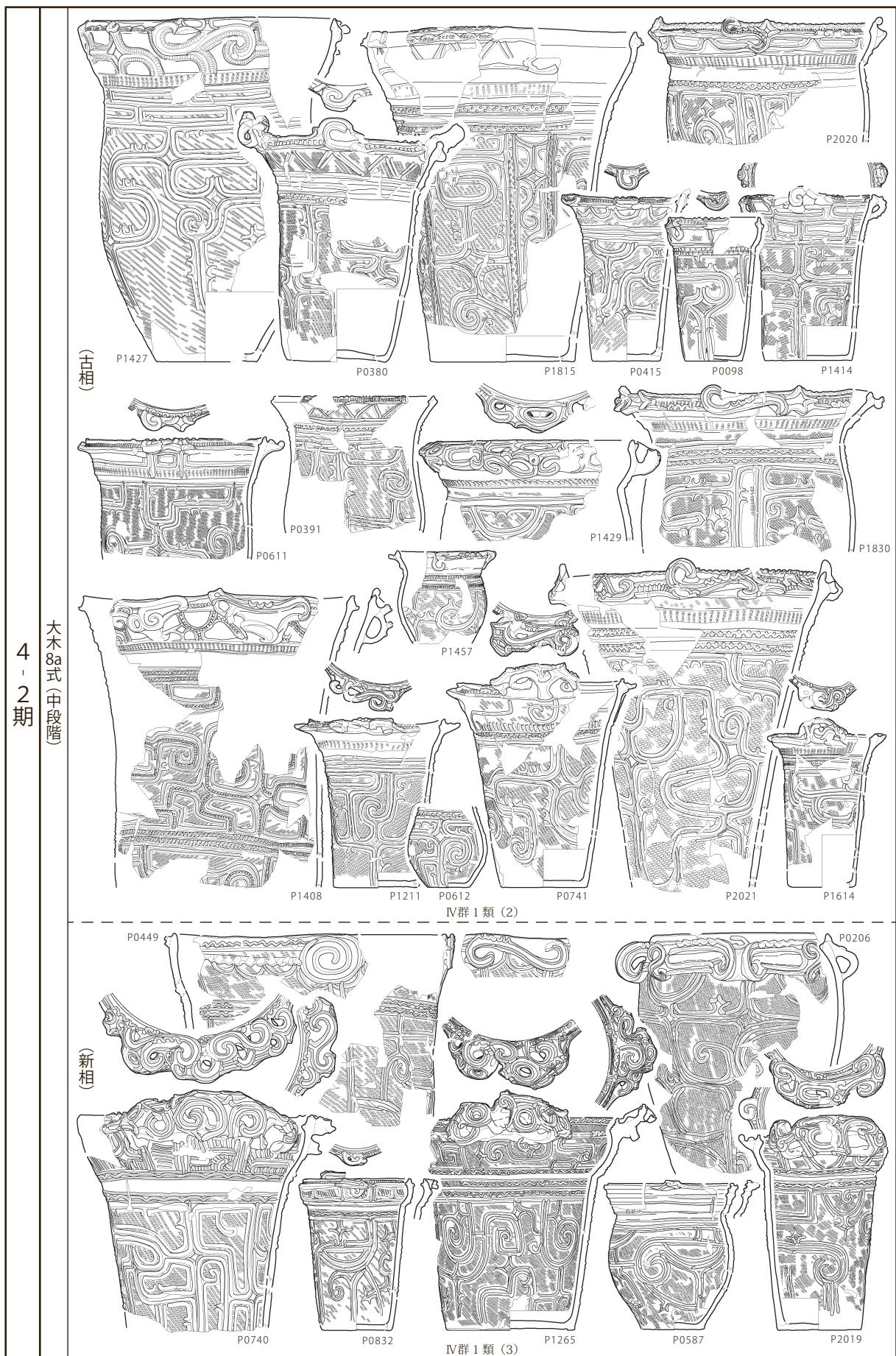
第30図 谷地遺跡出土土器変遷図（4）

3-2期:大木7b式新段階 (第30図) III群1類(2) [大木7b式新段階] で構成される。基本的には中ノ内系統から連続的に変遷する土器群であり、前段階と同様に宮城県南部から福島県北部、山形県域の土器群との親和性が高い。地域性を持った文様として、地文の縄文に縦位の指ナデ状条痕文を加える土器が本遺跡と小梁川遺跡に認められる。阿玉台II式に並行する時期と考えられるが、本遺跡での共伴は確認できない。

大木7b式新段階～大木8a式古段階の東北地方南端部から関東地方北部では、大木7b式と阿玉台式土器の融合(松本1982)によって成立した押引文を多用する諏訪系統(今村2010b)の土器群が分布域を形成する。具体的には福島県石川町七郎内C遺跡II群土器(松本1982)、白河市南堀切遺跡4・5号住居出土土器(寺島ほか1981・根本1984)、喜多方市博毛遺跡第II群1類土器(古川・佐藤1985)、いわき市大畑貝塚出土土器



第31図 谷地遺跡出土土器変遷図(5)



第32図 谷地遺跡出土土器変遷図 (6)

第5章 考古学的考察

(馬目 1975)、栃木県大田原市湯坂遺跡 T1-V 土坑出土土器 (海老原 1979)、茨城県日立市諏訪遺跡第 6・7 群土器 (鈴木ほか 1980) などであり、福島県域では南部に集中し北部の福島市周辺には認められないことが指摘されている (松本 1982)。本遺跡でもこれに類する土器は認められず、中ノ内系統の中核的な分布域と諏訪系統の分布域は緩やかな排他的関係にあることが窺える。

4-1 期：大木 8a 式古段階 (第 31 図) IV 群 1 類 (1) [大木 8a 式古段階] で構成される。口縁上部の構造変化は比較的明瞭な変化であるが、押圧縄文、指ナデ状条痕文、「S」字状突起などの文様要素や、胴部に膨らみを持つ深鉢など前段階から引き継がれている要素も多く、連続的な変遷が窺える。4 単位の波状縁や截頭波状縁を持つものも見られ、大木 7b 式との過渡的な段階とも言える。阿玉台Ⅲ式に並行する時期と考えられるが、本遺跡での共伴は確認できない。前段階では見られなかった、諏訪系統の系譜を引くと考えられる押引文を多用する土器が認められる。また、前段階で見られた指ナデ状条痕文の土器が口縁上部の構造変化を経て引き続き認められ、宮城県中部から福島県北部まで分布を広げている。このように、本段階には明らかな異系統土器は認められないが、いくつかの地域性を持った土器 (在地系亜種) の系統を引く土器の並存関係が認められる。

4-2 期：大木 8a 式中段階 (第 32 図) IV 群 1 類 (2)・(3) [大木 8a 式中段階 (古相・新相)] で構成される。福島県磐梯町・猪苗代町法正尻遺跡では 2 段階の変遷として捉えられているが、本遺跡では層位的に分離できる事例に乏しいことから段階区分としては一括した。新旧の様相が共存しながら漸移的に変化しているものと考えられる。前段階に地域性を持った土器 (在地系亜種) として見られた、押引文や指ナデ状条痕文は見られなくなり、円筒形を基調とする胴部と内弯気味に外傾する口縁部からなる深鉢を主体として立体的な複合橋状突起を付加し、単位性の不明瞭な文様を複数の要素を複雑に組み合わせて充填的に施文するという点において齊一性の高い土器群となっている。これまでの研究から宮城県南部周辺では、文様帯を分割区画し、縦位連続押圧縄文を特徴とする仙台湾岸地域や山形・米沢盆地を中心とする地域相と、大型で複雑に発展させた複合橋状突起と角押文や刺突文を主体とする福島県を中心とする地域相が見出されているが (丹羽 1989、中野 2008 など)、本遺跡においては前者を主体としながら後者も一定数存在し並存関係が認められる。

4. まとめ

本遺跡の土器群は 1 期 (大木 6 式新段階)、2-1・2 期 (大木 7a 式古・新段階)、3-1・2 期 (大木 7b 式古・新段階)、4-1・2 期 (大木 8a 式古・中段階) の 7 時期に区分された。全体としては宮城県南部から福島県北部および山形県内陸部にかけての地域相の中に位置付けられる。前半期 (1 ~ 3-1 期) には関東地方 (十三菩提・五領ヶ台・阿玉台式系統) および北陸地方 (新保式系統) の異系統土器を伴う。2-2 ~ 3-1 期における在地の大木 7a ~ 7b 式土器 (中ノ内系統) の器形と文様構成は極めて多様で複雑な様相を示し、型式学的分類によって全体像を把握することに困難さを伴う。このような在地の土器と異系統土器は 1 ~ 2-2 期にかけてそれぞれ独自性の強い一群として並存関係にあったが、3-1 期には一部の異系統土器の文様要素が融合して在地の大木式土器に亜種を生み出した。後半期 (3-2 ~ 4-2 期) になると、一転して異系統土器が確認されなくなる。そして、3-2 ~ 4-1 期にかけて在地または隣接地域で新たに生み出されたいくつかの地域性を持った土器 (亜種) が並存する段階を経て、4-2 期には器形と文様要素が集約化された極めて齊一性の高い土器群が成立していることが確かめられた。なお、本遺跡ではこれに後続する段階を示す口縁部内弯志向を強めた曲線的なキャリパー形の器形や有棘渦巻文を主文様とする曲線的な文様など大木 8b 式につながる要素を持った土器は認められないことから、本遺跡の集落は 4-2 期に終焉を迎えたものと考えられる。